

レオリオ=パラディナイト、色々あってあたおか系(他人評価)です。

文揚げ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

因みに「憑依」とか一丁前に語ってますが意識だけ憑依する感じなのできつと（端から見れば）レオリオさんは変人ポジ（二重人格的な意味）になるでしょう（予言）

因みにこのサイトでの（コピペを除く）処女作です。

---

幻想郷の為に頑張れ！紅魔館組！（ぎっくり）

こんなんです（適当）

真面目に語ると幻想郷のバランス調整の為に異世界（？）へ派遣されたレミアア一向が（精神のみ）憑依で何やかんやする話です。

投稿は不定期（重要）

原作キャラの死亡・生存あるかもしれません。モブ系のは普通に死なせますけどね！（無慈悲）

## 目次

異世界転生はテンプレ過ぎる、過ぎるよね？これももうわかんねえな！	1
え？今からでも入れる保険があるんですか!?あつ、ない…。	14
あー、もうめちやくちやだよ…。おつ、大丈夫か、大丈夫か？	29
(慈悲は) ないです。理不尽はあるけど (くず)	42
うー☆うー☆、あのさあ…(勝手な行動は) してはいけない (戒め)	56
んにゃぴ…、実は (小並感) って淫夢語録なんだゾ… (力なき声)	70
ああ逃れられない！これがカルマ (確信)	84

異世界転生はテンプレ過ぎる、過ぎるよね？これももうわかんねえな！

そこは忘れ去られた者共が集まる場所。妖怪、神、人間に妖精。所謂現代社会において空想や幻想、存在否定されたり、忘れられた道具や生き物が唯一存在出来る場所と言える場所だ。

それはまるで一種の楽園とも言える。しかし、その楽園も見方によつては様々な感想を持たれると言うことを忘れてはならない。それこそ、甘く見ていれば生きるか死ぬか、二つに一つの世界でもあるのだから。

その隔離された秘境の名は「幻想郷―げんそうきょう―」である。

そこはまるで現代社会において失われた近代文明の欠片も見えない自然に囲まれた緑溢れる豊かな土地。車も送電線も、コンクリートすら見えない幻想郷は、我々の感性からすれば「ド田舎」と呼ばれる類いかもしれない。

けれど、その田舎みたいな場所でも、現実離れたものが見れるだろう。例えば、人里より数十メートル以上は離れた上空。

そこでは色鮮やかな少女の嗜みが行われていた。お茶会なんて比でもない、けれど井戸端会議のようにどこでも行われる「ソレ」は、幻想郷では日常茶飯事でもあるものだ。

「ソレ」は現実離れた非科学的な決闘、「弹幕ごっこ」である。

弹幕ごっことは、この地（幻想郷）の調整者と呼ばれたりしている特別と言えば特別な「博霊の巫女」と呼ばれる存在と、この地を現代社会（幻想郷からは『外の世界』と呼ばれる場所）を区切る結界を貼つたと言われる「妖怪の賢者」によって制定した最も無駄で美しい決闘方法である。

別に大それたものではない。ごっこ、つまり遊びである。しかし、幻想郷の少女はそれで遊ぶ。いや、それしか遊ぶものがないのかもしれない。

それは、幻想郷の少女達のみぞ知る感覚だ。

幻想郷は所詮楽園と称しているが、どんな楽園にもバランスは必要不可欠である。それこそ、少しでもバランスが崩れれば儂いながらも崩壊は免れないだろう。

妖怪、つまり人外の類いと人間。これらのバランスは崩れてはいけない。それが幻想郷を支え、また根幹であるからだ。一度バランスが崩れてしまえば、規律は乱れ、世も末。幻想郷は大袈裟に言ってもないが、荒野と化してしまうだろう。

それほどもでに、人外と言う力を恐れ、そして敬っているのだ。しかし、それと同時に人外達もまた、人間を恐れ、敬っている。

それは何故か？先程も申した通り、人外は存在否定されたりして幻想郷へ流れ着いたのだ。その存在を否定したのは間違いない人間である。幻想郷にも人間は居る。つまるところ、人外の存在は幻想郷の人間の認識によって保たれているのだ。

「わざと」文明を退化させた人間達は、所謂平安時代とかで良くある陰陽師だとか信じてるタイプであり、妖怪の存在も認知している。否定するのはあり得ない、寧ろ物事の問題は一に当人、二に妖怪のせいだ。何て決めつける事もあるだろう。

妖怪は人間の「畏れ」と言う感情を、神は人間の「信仰」を糧に、其々が各々、全て人間の存在が在ってこそその存在の確立なのである。

だからこそ、人間は人里を作る。幻想郷では人里から出ていない人間、またはその人里自体を襲ってはいけないと言う掟があるのだから。(幻想郷には様々な掟があり、挙げたのはその内の一つ。)

「さあ、皆全員集まったかしら？」

そこは目に優しくもない程に赤い館。いや、赤いでは生温い、紅。それこそが正しい表現だろうか。

霧が立ち込み、湿気の多い湖の上、正に立地最悪と言われても可笑しくはない場所に大きく建っているその館は毅然と本日もその存在感を絶え間なく出し続けていた。

辺りにはまだ日中であると言うのにコウモリが飛び回り、湖畔には

青色の妖精と金髪をした闇を纏う妖怪が戯れていた。いや、青色の妖精が単に喧嘩を吹っ掛けて掛けているだけかもしれない。

「彼女」にとって忌々しい太陽が湖を照らし、それがまだ彼女の活動時間ではないと証明していた。こんな時間に何をするのか、何の目的があつて館の主要住人を集めたのか。そして、これから何をするのか。それは呼び掛けをしていた館の主である彼女が言うまでは何も分からない。

そこは館の：紅魔館の食堂であつた。

広々とした空間に椅子と机。まるで講堂のような食堂も、内装は紅色をベースとした壁やシャンデリアが多く、賄えない光源は燃え尽きない不思議なロウソクによって静かで怪しげに炎を揺らしながら代用していた。そこに居るのは計六人の少女達。

一人は先程呼び掛けていた少女。水色のウエーブがかかった短い髪を持ち、肌は白く、目は充血したような赤さではなく、本当に瞳孔が赤い瞳を持つ小さな女の子。淡いピンク色をした西洋風ワンピースドレスを見事に着こなし、頭にはドアノブカバーのようなふんわりとした可愛さのある特徴的な帽子がある。

そして、一番の特徴は背中に生やす聖書に記された悪魔のような黒く、体に見合わぬ大きな翼だろうか。この時点で、彼女が人間ではなく、人外の類であることを物語っていた。

「今回集まってもらったのは他でもない。久々の『ゲーム』のお時間さ」

ニヤリと不敵な笑みで彼女は側近のメイドらしき少女が渡してきた小さな手紙を手提げ、その場に集まっている他の少女に高々と見せ付ける。

メイドらしき少女は銀髪の髪、左右の差し髪を三つ編みにし、頭にはフリルカチューシャを付け、メイド服を着用している。

しかし、彼女の太股、袖の裏、布の裏地：至る所にナイフを携帯しているのだ。メイドの少女が銀のナイフを使うとき、きつと時が止まったようにして幻想を見せ付けられることだろう。

「レミイ、それは一体なんなの？それに…」

「態々妹様まで出して、それでそんなに重要じゃなかったならば百年は図書館に閉じ籠らせて貰いますからね」

「そう言うな、唯一の友人じゃあないか。仲良くしましょうよ？ねえ、パチエ？」

紫色の長髪をした根暗そうな女の子。彼女は最初興味無さ気であつたが、手紙を見せられては聞かないと駄目だろう、と謎に空気を読んでみて質問してみた少女だ。つまり、彼女は率先してこう言う話し合いには参加しない性格であることを一瞬で分かる訳だ。今回収集した少女とは友好的であるのか、互いに互いをあだ名で呼んでいるようだ。

「お嬢様に咲夜さんに…重役揃いですね」

「ねえ美鈴、これでしようもない理由だったら御姉様で『おままごと』…しない？」

赤髪の長髪をメイドの少女と同じように差し髪だけ三つ編みにし、頭には帽子を。帽子には「龍」なんて書かれている中華系の少女。しかし、日本語を流暢に話すので中華風の少女なのだろう。きつと本場ではない。それは彼女のみぞ知るが…。

そんな中国少女は言葉に詰まったように苦笑いしながら次の返答に迷っていた。そんな風にしたのは、最初にこの話題を出した悪魔の羽を持つ少女のように特徴的ドアノブカバーみたいな帽子を着用し、赤いベストとスカート、フリルがついたりボン。金髪をサイドテールで縛った少女。

しかし、彼女もまた背中に翼らしきものを生やしている。何故「らしきもの」なのか。

それはあまりにも異様だからだ。

悪魔の羽は皮膜がある。しかし、彼女にはその部分の代わりに、どの宝石に例えてもソレに劣ってしまうと言つても過言ではない程にきらびやかで美しい宝石のようなナニカが、枯れた木の枝のように生える悪魔の羽の骨組みのような部分に吊り下がってるからだ。それも、一つや二つではない。色もきらびやかで鮮やかなのである。

その紅色をした双眼は愉悦に歪み、その後中国少女に「冗談よ」な

んて語る。

「ふふっ、なに…そんなに面倒臭がる事はないわ。この手紙はあの胡散臭い『賢者』からの差し出し。」

わざと興味を引いたためか、それともまた別の目的があるのか。彼女は賢者の名を言わず、ただただソレの総称とでも言うべきか。そのように語り出す。

案の定、金髪の不思議な少女はそれに好奇心を撥られ、キラキラ、とは言えないが目を光らせながら机に乗り出すようにして彼女に問う。

「へえ…お姉様、そのお手紙は何て書いてあるの？」

どうやら、彼女と少女は姉妹らしい。どうりで背丈も外見も多少似ている訳だ。つまり、彼女はこの館の主の妹としてそれなりの地位に居るのだろう。

もう既に少女の中に姉で『おままごと』するつもりは無くなったように、目先の興味は彼女の持つ手紙に向けられていた。

さて、姉の…いいや、この紅魔館の主こと「レミリア・スカーレット」の持つ手紙。それは幻想郷創立者の内の一人から届いたものであると再確認をする。各々が、そのような手紙であると把握した後、レミリアは「こんなことしなくても…」なんて愚痴を溢しながら開けようとする。

「あら、気紛れと言う言葉を知らないのでしょうか？」

そのとき、辺りにはまたもや少女の声が響く。十中八九賢者であろう。クスクスと言う笑い声がこの食堂に響き、レミリアの妹である「フランドール・スカーレット」も、レミリアの友人の「パチュリー・ノーレッジ」も、従者の「十六夜 咲夜」も、門番である「紅 美鈴」も、全員が全員、その声の主を探した。

その声の主はレミリアの首もとを白い手でスルリと撫でるようにして触る。恐ろしいことに、その手は腕から後が無い。いや、正確に言えば今までは普通の壁であった場所、何もなかった空間に『裂け目』が発生し、そこから手が伸ばされているのだ。一番に反応したのは従者、十六夜 咲夜であった。

素早く太股からナイフを三本取り出し、投擲。それらは一瞬何も狙



わかれて無いと思われるがそんなことはなく、寧ろあの一瞬で出せるだけのナイフの最大数を取り出し、最速で、自らの主に当たらない軌道で手だけを狙い、投擲しているのだ。

恐ろしい早業。恐ろしい手腕。されど繊細。

ナイフは見事刺さり、ズルリと重々しげに空間の裂け目へ戻っている。

その後、レミリアとは反対、この長机の対極の位置にて声の主は姿を表す。

「見事な仕込み芸、貴女の飼いだは今日も調子が良いようで。」

「当たり前だ、咲夜は優秀な掃除係だからな。最も、貴様を掃除することとは敵わなかったようだ」

「ふふつ、あの一瞬であの正確さは誉めるべきものですわよ?」

既に壮絶な舌戦が始まっており、そこに何人たりとも介入することは許されない。美鈴はウトウトとし始める。

「手紙を寄越した癖に門を通らないのは、義務教育の敗北か?」

「あら、妖怪は自由に生きていますわ。人間の『義務』なんて押し付けられないで欲しいわね」

両方一步も引かず、その頭の中の思考を素早く回転させながら、自らの威厳を傷付けまいとしている。美鈴は眠り始めた。

「そちらこそ、私が手紙を送りましたのに見てもなければ愚痴を溢してるじゃありませんか」

「何を今更、そもそも貴様は神出鬼没を売りにしているのでは無いのか?」

両者の視線は合い、そこで火花がバチバチと散り、辺りはただただ静かに、呆れながらそれを眺めていた。美鈴は夢を見始めた。

『「このヘンテコ妖怪が……!」』

「お二人様、そろそろお辞め下さい…」

声が揃った所で、本題に移りたかったのか、咲夜が声を掛ける。間に割って入ったのだ。美鈴は咲夜のナイフが頭に刺さり、血が吹き出していた。

「先程は失礼しました、八雲 紫様。紅魔館へよく足を運んで下さい

ました。先程の手の治療をしますのでお手を…」

『八雲 紫』と呼ばれた、先程までレミリアと舌戦を繰り広げていた少女はクスツと笑みを浮かべると、彼女は両の手をひらひらと動かした。「そんな傷、どこにもありませんわ。一体何の事でしょうか」

と述べる。そんな筈はない、と咲夜は目を見開きながら一言申し、彼女の手を触る。

…

…

………！

確かに傷は無かった。彼女の手も、その手袋と傷一つ無いシルクのような触り心地であった。どういうことだ、なんて苦惱していると「無駄よ咲夜、そいつは胡散臭いからね。先程の手も『ソイツ』のじゃあないわ。」

レミリアの言葉でハツ、と気付いたのか、咲夜は紫を見る。薄く笑みを浮かべるその顔に、咲夜は何かの感情を抱く。思わず一歩後退りするも、紫はそれに興味を引いてないのか、レミリアの方へ向き出す。咲夜は、今この瞬間、不思議なことに『命拾いをした』と言う感情が渦巻く。

「あまり私の従者を虐めるな、大切な駒でもあり、家族でもあるのだからな」

「ふふっ、それは失敬」

呼吸が浅くなっていく咲夜は突如、何だか急激な安心感を得た。レミリアはその現象を何となくだが察している。

「さて、本題に入りましょうか…とは言っても、手紙を読んでいないのでしょうか？」

「これでは一から説明しなくちゃいけないわ。何の為の手紙だと思ってるのよ」

はあー、とため息を吐き、少しだけ小言を述べてから彼女は語る。

曰く…

最近の幻想郷はバランスが少しだが傾き始めている。妖怪ではなく人間の数の多さである。此方としても『間引き』しているが、それ

でも追い付かない。何故ならば人間が人里から出ないからだ。

本来、時々であるが人里から出る人間が居る。その存在が妖怪に食われることで畏れと間引きが同時に行われていた。しかし、最近人間が出なくなっただので、中には消滅した妖怪が出てきたのだ。

故に、一度、幻想郷の掟を知らない人外をわざと幻想入りさせ、人里を襲わせ、一定の大量処理を行う。しかしながら、幻想郷内の妖怪は既に幻想郷の掟を知り、破るとどうなるかを知っている。また、外の世界にはもう有望な妖怪も何も居ないので、レミリア達に『外の異世界』へ行つて貰い、博霊の巫女等の人間が退治でき、かつ後処理が楽な人外を見付け、此方に報告と捕獲を頼みたい。

とのことだ。何故レミリア達なのかと言うと、彼女達は一応館を持つている。姿が見えなくても違和感が無いからだ。それに、どうせ此処へ来れるのは限られる。と、言うよりも用件が無ければ誰も近付かないのだ。

似たような場所で旧地獄、つまり地底の地霊殿があるが、其方は紅魔館と違って『管理』をしている。故に、候補から除外される。

そう、最も適切と考えられる勢力がレミリア達しか居ないのだ。外の異世界でも生きてられ、かつ幻想郷のパワーバランスから少しの期間外れても多少問題の無い勢力と言うのは、彼女達くらいしか居ないからだ。

ここまで聞き、レミリアはうん、と頷くと

「その願い、聞き入れても良いが条件がある」

と、述べる。

怪訝な表情を浮かべる紫。

緊迫した空気が辺りを支配する中、先に言葉を発したのはレミリアであった。

「貴様はあくまでも私に頼む立場の者だ。一方的な要求は好まないのし、なんなら不公平ですらある。聡明な賢者サマなら分かるでしょう？」

「此方からの要求は三つよ…」

一つ、我々が幻想郷を離れることなく、肉体を離れて精神が外の異

世界へ行けるようにすること。(この際、いつでも戻ってこれるようになる、また、その際混乱は咲きたいので同時に行けるのは二人までとする)

二つ、妖怪が居ない、全く別の異世界にすること。最早幻想郷とは関係の無い地を選ぶこと。

「そして三つ目…それは、面白い世界にしろ」

「と、言いますと?」

「とある文屋の新聞に『漫画』と言うものがあつた。所謂書物よ。コミカルなものが良いなあ…?それで、意識を繋げるのは主人公ではなく、主人公の一步二歩、何歩も後ろを歩く奴が良い。」

「脚光を浴びさせるのさ。私が意識を預けるのだ。ならば、一番にやらなくては意味がない!元々一番の奴には興味は無いけどね」

どこまでも貪欲、どこまでも我が儘。紫は条件を提示してくると予め読んでいたのか、だがしかし、それでも予想の斜め上を行ったのか、細めていた目を開け、レミリアを見据える。

不敵な笑みを浮かべたレミリアは自信満々であり、引き下がる様子は一切見受けられない。流星は傲慢な吸血鬼の末裔である。また、彼女の言うことはごもつともだ。

何せ紫側から物を頼んでいるのだ。これがレミリア側からであったならば話は違っていたかもしれないが…いや、まず前提として幻想郷の存亡が掛かっているし、レミリア側であるならばこんな会合は始めから無かつただろう。運命と言うのはそう言うものだ。

いつの間にか紫の前には淹れたての紅茶が出されていた。香り高い紅茶は和風な幻想郷においても珍しい飲み物だ。とは言つても外交的役割を持っている紫からしたらそこまで価値もない普通の飲み物ではある。

「よろしいですが…その『コミカルなもの』と言うのは此方が選んでも?」

「私が選びたいわー!」

そこで、漸くレミリア以外の声も上がる。先程手紙に興味が湧いていたフラン達。彼女は座り直していたが、またもや勢いよくその場か

ら立ち上がり、手を上げる。まるで小学一年生の教室のような雰囲気  
を一人だけで作り上げてしまうようだった。

彼女はスキマを開き、中に居た式神へと声を掛けた後に

「では、此方で先に候補を絞っておきますが…その中から選ぶ感じで  
良いかしら？外の世界の書物は多いのよ」

「それで良いわよ！ね、お姉様？」

「まあ、決める本人がそう言うのなら文句は言えないでしょうね…  
紫、近日中にフランへその『漫画』と言うものを渡しておいて頂戴」

紫は椅子へ腰掛け、優雅にも紅茶を嗜む。その様子は近日中ではな  
く、今日中にも渡せれる、なんて物語っていた。当たり前だ、彼女  
は賢者である。そこに余念も無く、スピーディーに終わらせられるの  
だ。流石賢者様、なんて誉めてくれても良いが、他の評価は『胡散臭  
い』が極めて多いので、少しかだけ不服なのはここだけの秘密だ。

そんなわけで落ち着きもしない楽しくもないお茶会が終わる頃、紫  
はスキマを開き

「ではフランドール、これらが候補のコミックよ…あら失敬、先に申し  
上げる前に確認してくれるだなんて助かりますわ」

何が起こったのか、フランへ渡される前に、従者の咲夜が検閲、つ  
まるところ何かしら危害が無いか時間を止めて全て確認したのだ。  
一冊一ページコマ、全てを終わらせていたのだ。しかし、時間を止  
めていたので、その努力は彼女のみぞ知る…筈だが、紫はそれに気付  
き、礼を述べる。

彼女の時間は永遠ではない。それと同時に、他人の時間も止めて、  
静寂な世界を歩くことが出来る能力。これぞ彼女の『時を止める程度  
の能力』である。似たようなものに『迷いの竹林』と呼ばれる場所の  
姫君の能力があるが、それはまた後日、話せるならば話させて頂こう。

咲夜が時を止めて調べたところ、特に何も無かった。強いて言うな  
らばフリガナが振られており、難しい日本語は英語で意味が書かれて  
いたりしていた。手書きのようなペンのインクが紙の上を走ってい  
るのを見付けた。

どうやら紫の式が、あの無駄で油断も出来ないお茶会の間に済ませ

ていたらしい。ざつと漫画を見ても数百冊はあるのに、よくあの短時間（大体二時間程度）で済ませられたものだ。

更に言えば、元々レミリア達が英語圏、つまり国外に居たことを知っていて、それでいてまだ日本に来て間もないと言うことを把握している賢者にも恐れ入った。そこまで調べているのか、等と咲夜は改めて紫を人知れず警戒するだろう。

そんな警戒も惜しく、レミリアは紫から本を受け取り、机に並べていく。勿論、種類別だ。大体五種類の漫画が並んでいて、どれも幻想郷じゃ見られない技術が使われているのが分かる。これを河童にたれ込めばどれ程の利益が出るのか、何て考えていたら、紫が釘を指してくる。

「読み終わり次第、この部屋の角に置いて下されば回収しますわ…と、言うよりも外部へ持ち出さないで頂きたい。」

「レミイ、それは私からも言っておくわ。本は直射日光を浴びると痛むの。それは貴女もでしょう？まるで吸血鬼みたいなのが本なの」

「…あー、はいはい。分かってるわよ、イチイチ言わなくて良いわ！」  
不貞腐れた子供の様に大袈裟に反応を取ると、レミリアはフランへ五種類の内の一種類、第一巻を渡す。きゃっきゃっ、なんて喜ぶ妹を彼女は軽く微笑みながら見守り、フランが早速パチュリーの使い魔である『小悪魔』と暇過ぎて門番へと戻った美鈴に五種類全てを持たせて自身の部屋へと向かう。

時刻は既に夕暮れを指していた。

「さて、ではお暇させて頂きましょう。また後日お伺いしますわ」

「確定な日付も寄越さないなんて凶太い奴ね、今度は門から入って来なさい。つてもどうせまた今日みたいに来るのだろうけど…」

「ふふっ、神出鬼没が私の専売特許ですから」

「……本当、喰えない賢者サマだ」

ふん、とスキマを開いて消えていく紫を、拗ねたかのように踵を返してレミリアも自室へ戻る。咲夜は自分の仕事へ、パチュリーはフランへ使い魔を使うな、なんて小言を言い地下室へ。

各々、各自の日常へと戻ったのだった。

「ハックシユンツ！…誰か俺の事噂してんのかなあ？」

「ははっ、何だそりゃあ？風邪だろ。だって、お前の事を噂する奴なんて居る訳ないだろ、『レオリオ！』」

「ンだど〜!？」

彼は所謂スラム街に住む一人の少年。近くには親友とも呼べる、また同い年の様に見える少年が居る。

親は居た。良くある運命のテンプレ的な両親は他界して天涯孤独である、等と言ったことはなく、貧乏ながらも、彼自信は幸せを感じていた。生きていく上で今のところ不自由はない。時々裕福な奴らが馬鹿にしてくるが、今に見ている、なんて思える程度に精神は安定していた。

彼の夢は親友の『ピエトロ』と共に大きな会社を立ち上げること。そして今まで馬鹿にしてきた裕福な奴らを見返すことだ。

だから今は健やかに育つ。そうすれば成長して大人になれるからだ。当然、隣にはずつと、ずつと親友のピエトロが居ると彼は思っている。神様はきつと俺達を見てくれてるんだ、なんて真摯に居るのかも分からない神を信じて止まない少年。

彼は自分が漫画のキャラだなんて思わないだろう。だって、その世界は確かに存在していて、そこに彼が生きているのだから。寧ろ、自分は漫画のキャラである。なんて語る輩は変人かその類いであると思うだろう。誰も疑わない世界、誰も未来が分からない漫画。

そこで彼は息をして、両の足を動かして、今日も明日も生きていくだろう。だからこそ、彼一人では運命は変えられない。そんな力はないからだ。

残酷に、夢く、そして愚かにもソレを語ろうとする。

運命は変えられない。つまり彼の友達であるピエトロが死ぬのも、彼が偽悪的な性格になるのも、金で何でも買えると思うのも、変えられないものになるだろう。それは根本的なものだからだ。今は顔を

見せていないだけで、それは奥底に沈む石の様に確かに存在している。

運命は、自ら切り開く等と言われているが、実際は選んでいる様に見える、ただ牽かれたレールを辿っているだけである。そこに意志は要らない。

しかし、自らでなければ変えられると思われる。例えば規格外の力、例えば異常な現象、例えば異世界からの介入。

彼の名前は『レオリオ』パラダイナイト』と言う。今後の運命をねじ曲げられ、波乱に満ちた生活を送る事になる少年だ。



え？今からでも入れる保険があるんですか!? あっ、ない…。

「れ、レオリオ…？お前、どうしちゃったんだよ!!」

ああ、子供の泣き声と共に『この体の持ち主』の名前を叫ぶ人間が居る。

かわいそうだ、なんて思わないが…それでも、もう、この少年の知る『レオリオ』はこの世に居ないと言うのに哀れなものだ…。

フランは地下室でうんうんと悩んでいた。側には姉の友人の使い魔の、なんだか文章にするにはややこしくなる表記の必要な小悪魔が一人。小悪魔は緊張しながら、その小さな悪魔の羽をパタパタと動かす。フランは枯れ木のような骨組みに釣り下がる宝石のような何かを揺らしながら、目の前の五冊の本を眺める。

各々、つい先週受け取った本の一巻だ。右から『呪術廻戦』、『HUNTER×HUNTER』、『ゲゲゲの鬼太郎』、『D・Gray-man』、『XXXHOLiC』と言うタイトル。どれも作成年月も作者も何もかもが異なるが、それでもメジャーな漫画と呼ばれるもので、人間の娯楽として愛されていた。彼女は最近、初めてその絵と文章による道楽を楽しんだ。すっかりハマってしまった彼女。だからこそ悩んでいた。

「どれを選べばもつと楽しめるのかしら」

「フラン様、もうかれこれ三日は悩んでますよう…」

ひい、なんて恐ろしげに声を震わせながら現状の確認をしてくれる小悪魔。それをギロリと睨みながら、分かっている、なんて呟き、彼女は自室の壊れかけたソファへ座る。小悪魔は座るだなんて恐れ多く、座ったら殺されるじゃないかとヒヤヒヤしながら立ち続ける。

ここ最近、フランはずーつと悩んでいた。それは勿論、先週の件によるものだ。彼女はあれから食事が喉に通らない程、その漫画と言うものにハマリ、大層気に入ったのだ。小説のようで絵がついていて、場面がイメージし易い。特徴をしっかりと捉えられていて、読んでいてワクワクとした気持ちになるのだ。

選ぶなら、とびつきのものが良いし、でも面倒臭いのは嫌だ。あとは主人公達と『遊べる』ものが良い。なんて考えている。一応、完結しているものは既に読破し、途中までのものもそこまで読破した。だからこそ悩んでいる。

コンコンコン。

リズム良くフランの部屋の固く重たい扉がノックされる。フランは返事をする、外見とは裏腹に扉は軽く開かれた。

そこに居たのは紅魔館のメイド長の咲夜だった。銀髪のショートカットに指し髪の両三つ編み、頭にはフリルのメイドカチューシャがセットされている、正しく『メイドです』なんて名乗っているような少女である。

低姿勢で彼女は

「妹様、お食事の用意が整いましたので御越しく下さい」

とだけ述べるとその場を一言断りを入れてから去ろうとする。しかし、それをフランは止めてこちらへ来い、なんて手招きするだろう。

従者として断る事もないので、素早く移動を済ませると、咲夜は小悪魔に目伏せ、つまりアイコンタクトをして出ていかせる。自身の主人にも用件を伝えてこい、とのことだ。

小悪魔はそれに従い、静かに扉まで飛び、忙しなく出ていくだろう。辺りは静寂に包まれる。

「何用得ございましょうか、妹様。」

対面するなど烏滸がましい。故に彼女はフランの一步後ろから声を掛ける。フランはそれに対し、特に何も思わず、そのまま向き合ってもせず、用件だけを伝えるだろう。

「咲夜、今から貴女個人に聞くのだけど、この五種類の本で興味を惹かれるのは何かしら？」

「興味、ですか？」

何か罰せられるのか、とでも思っていた彼女は意表を突かれたかのような声を出しながらフランの持つて来た本を拝借する。五冊、先程タイトルを述べた通り、どれもメジャーである。

しかし、咲夜もまた幻想郷の少女となった者だ。最早外の世界とは縁を切ったと言っても過言ではない。目の前に出されて頭上にハテナマークが浮かび上がることだろう。

手に持ち、パラパラと一巻の内容をざっと流し見る。雑誌のようなものかと思っていたが、これは確かにフランの中のマイブームになりそうだな、なんて理解しながら、全てを拝見し終わり、彼女は姿勢を正す。

「私は『HUNTER×HUNTER』と言うものに惹かれました」  
「して、その心は？」

緊迫する空気。咲夜はキリっとした目線でフランを見る。フランはその剣幕に少しの真剣さを垣間見たような気がした。

自然とフランの肩にも力が入り、緊張感を持つ。咲夜は五冊並べられた本を見ながら一言。

「『ハンター』と言う文字があるから……ですかね？」  
「ううん、咲夜らしいと言うか何と言うか……」

少しの真剣さを垣間見たような気がしたが、気のせいだったようだ。緊張感を持っていて馬鹿らしい、なんて思ったのか、はあく、と大きな溜め息を吐く。そう言えば咲夜は少しだけどこか抜けていたんだった、忘れていた。

彼女の言葉は半ば宛にならない。呆れたフランは五冊を抱えてすぐに部屋を出た。思い立ったが行動、と言う言葉が今のフランにピッタリであった。

部屋に残された咲夜は、いつの間にかその部屋を掃除してから消えていた。きつと身支度や食事の付き添いを始めるのだろう。それはもう少し後になりそうだ。

「パチュリー、どこに居るの？」

「昨日の今頃にでも居た所に居ますよ、妹様」

「それって結局どこなのよ」

パチュリーの声が聞こえる。それはこの紅魔館に付属したように、しかし地表に出ていたら間違いなくメインの建物の1つになっているであろう彼女が司書を勤める『図書館』。そこに次のフランの目的人物が居た。しかし、姿は見えず、フランの脳内に直接呼び掛けるという、何とか言うか良くある『コイツ、脳内に直接…!!』的なテンプレをやつてのけていた。そこまでは望んでいないのだが、と言う意思を顔を出しながら、適当に図書館内を飛びながらパチュリーを探す。

小悪魔が本の整理をしていたのが上から見えたり、幻想的なシャンデリアが所々に釣り下がっていたりと、魔法的な内見していた。まあ、魔法使いが司書をしているのだ、当たり前と言ったら当たり前かもしれない。

「もう、どこに居るのさ！どこにも居ないじゃない！」

「今興味深い所を呼んでるのだから、出来れば邪魔しないで欲しいの」「アイツに言い付けてやるからね！」

「どうぞご自由に、レミイはシスターコンプレックスなんて患ってないだろうから言い付けたとしても無駄だと思うのだけれどね。」

「むう…!!」

のらりくらりと言葉を躲される。これじゃあいつまでたつても見付けれない。このまま白骨化するのをご遠慮だ。仕方ないので戻ろうと背後を向いたとき、パタパタと一旦本を整理し終えた小悪魔を見付ける。彼女に付いて行けばもしかしたら？なんて考えが浮かび上がり、フランは後からこっそりと付いていくことにした。

右に左に横に真っ直ぐ。迷路かなあ、なんて段々と思い始めた矢先、小悪魔のこの先には目的の人物が居ることを発見する。

「ふふっ、やーっと思付けた！」

「…はあ、館の主の妹を追い返す魔法は…」

「ひええー！ごめんなさいパチュリー様あ〜！」

静かだった図書館は少しの間だけ騒がしくなりそうだ。

さて、フランはさっそく本題へ移る。彼女はパチュリーの前へ持っていた五冊の本を出し、眼前へ持つていく。パチュリーは表紙を一読

し、その後、これがなに？と視線で物を言う。やらやれと呆れたフランは

「言葉を言いなさいよ、言葉を…まあ、良いか。」

「パチュリーはこの五冊のどれに興味を持つてるの？ああ、あと小悪魔も。」

「私は『ゲゲゲの鬼太郎』ですネ！何だかおかしな名前で面白そうです！」

安直な名前でさきつと答えた小悪魔に対し、パチュリーはじつと黙っていた。何事か、とフランはパチュリーの顔を覗き込もうとしたとき、パチュリーは一冊の本を手に取り

「これ」

とだけ伝えた。手に持った本は『X X X H O L i C』、知る人ぞ知る著名な作品だ。へえ、と相槌を打つフラン。理由は語られない。それがパチュリーと言うものだ。求められるまで沈黙を貫く。一重に、魔女と言うのはそういうものなのかもしれない。いや、ただ根暗だけなのかもしれない。社交的な性格は生きていく上で形成されていくものの一つであるから。

好奇心が旺盛な子供の内、パチュリーは何をして生きていたのだろうか。しかし、それは誰にも分からない。フランは知ろうともしない。

何故他人の過去に態々足を踏み入れなければならないのか。それで安い同情でもしたら良いのだろうか。

怖かったね、辛かったね、分かるよ、うん、分かる。なんて軽い言葉で人を救えるのならば、過去が報われるのならば、フランのような者も居なかつたし、世界は仲良く握手で手を繋ぎ、平和的なピクニックでも出来るだろう。実態は不可能であるが……。

良くある狂気に踊らされるフランとは違う。聡明な、賢い故の『狂気』が彼女の中に燻っているのだ。だからこそ不気味、だからこそその狂気。論理感の欠如と言うべきか、共感性の欠如と言うべきか、フランは確かに狂っている。しかしそれは発狂等の単純な狂いではなく、長年の自主的など他者からの監禁故の狂い。それこそが彼女を構築

する大事な要素の1つだ。

「そろそろ行くね」

パチュリーは何も言わずに本を読み続ける。フランが何か声を掛けたとしても、それが例えレミリアだったとしても、態度は然程も変わらないだろう。

続いてフランは日傘を射し、門へと向かう。

立派な門は少しだけ開いていて、その前には色様々な花が植えられた花壇。赤レンガで花ごとに分けされた整った花壇は、門を抜けた者を出迎える第二の門番と言うべきか。霧が立ち込めるこの立地で、その霧と相まって花は綺麗に咲いている。

その花卉には露が滴り、湿度が何となく分かる程度にジメジメと、しかし何故かそんな嫌な気はしない。雲隠れした太陽の光が垣間見え、花壇に差し込めば花卉についた露に光が反射し、キラキラと輝いている錯覚が起こる。庭の中央には小さな噴水が常に水を吹き上げ、空中で曲がり、重力に従い落ちていく。

そんな綺麗な花壇と噴水を通り越し、彼女は目当ての人物を見付ける。

「あら、随分と小さなお茶会をしてるわね、美鈴」

「うえっ?! 妹様ア!?!」

「えっ、門番…お前の妹か? ルーミア、そうなのか?」

「違うよチルノ、コレは食べちゃ駄目な吸血鬼だから、えっと、この館の主の妹ね。」

門番こと美鈴は暇なのか近くに居た妖精や妖怪を集め談笑していたらしい。仕事はどうした、仕事は。

また、氷精、チルノと呼ばれていた者は美鈴が『妹様』と呼んだので、勘違いをしたのか、フランと美鈴が姉妹等と間違ってしまう。しかし、それを金髪に黒いワンピースドレスを着た少女、ルーミアが正す。ゆったりとしているが、彼女は人食い妖怪だ。残忍な性格を内に秘めており、外見と口調に騙されてはいけない。

フランは微笑を浮かべ、辺りを一瞥。どれも一応の意志疎通は可能な知識や理性を持つ者ばかりで、何となくここの魔力や自然が豊かな

のだ、と言うことが確認出来る。

「ところで…あはは、妹様はこんなところにどのような用件でしょうか？」

「ああ、そうそう。忘れていたわ」

懐に持っていた五冊の漫画、咲夜やパチュリー（おまけで小悪魔）にも聞いたように美鈴にもどれが良いか、と訪ねるだろう。

そして、それと同時に、その五冊が気になって顔を覗かせていたチルノとルーミア。やはり好奇心は猫をも殺すと言う言葉の通り、好奇心は何者も抗えないのだろう。時が時であったならば、彼女達はきつとまた、別の存在として幻想郷に居ただろうが、それはこの物語に関係がないので、またの機会と言うことにしておこう。

それはさておき、フランは二人の様子を見て、では二人にも見て貰おうと閃いたのか二人にも見えるように本を広げる。

二人は目を輝かせ、各々一冊、手に取るだろう。

「どうかしら？…どれが気になる？」

「そうですねえ…あゝ……迷いますね、やっぱり」

「門番は優柔不断だなあゝ！オマエらとは違うこのチルノ様は、コイツを選ばぜー！」

そう言いつつ手に取るのは『HUNTER×HUNTER』だった。理由を訪ねると『かつこよくて最強なあたいにピッタリだから』とのこと。いやそれなら『XXXHOLIC』も同じでは？と考えるがそれを言っでは終わりな気がする。故にフランは何も触れないことを選択した。

「私はこの『D・Grayman』かしら…何だか食べ応えがありそうなもの」

「ええ？それを言うならこの『呪術廻戦』の青年よ。」

ルーミアが述べた言葉を、美鈴は本の表紙を見せながら件の青年の姿を見せるだろう。フランには良く分からない話題だ。

彼女の介入を許さないように繰り広げられる『どちらが美味しそうか』と言う論題はヒートアップしていき、やがて好みの肉質の話になり、最終的に意気投合するのはまだ少し先の話になるだろう。

「なあなあ、いもさまっ・ふらんすさまっ？つて奴はどれが良いと思うんだー？」

「…さあね、まだ決まってないわ。あとフランよ、いもさまでもふらんすさまでも無いわー！」

チルノはフランを妹様を砕いて『いもさま』や『ふらんすさま』なんて呼びながら問い掛けるも、彼女は特に決まっていなくて語る。だからこそ、こうやって館の住人＋αで聞いているじゃあないか、と脳内でぐるぐると愚痴を溢しながら少しだけ不貞腐れた様子だ。

「でも、私達一介の者よりも、やはりここは我らが主ことレミリアお嬢様に聞いた方が良いんじゃないですかね」

美鈴はそんな提案をする。フランもそれは最初から考えていたが、ここに来るまで悩んでいた。理由は単純、何だか気まずいからだ。いや、いつもなら普通に話せる。そこに壁も何もない。しかし、何故だか今はとても気まずくて、緊張している。

何故だろうか、自身の選択が今後の運命をガラリと変えるからだろうか。それともただ単に急に姉妹の仲が拗れたのか。心境と言うのは複雑で、読み解くのは本人にも難しそうにしている。それを表層に出さない辺り、フランと言う少女は食わせ物な気がする。

しかし、もう聞く相手はフランの实の姉しか居ないのだから、彼女は美鈴達に一言申し、踵を返せばその重たい足を引き摺るように館へ入っていく。

階段が一段一段遠退いていくような感覚に襲われる。しかしそれは錯覚で、着々と姉の部屋に近付いていく。館と同じ赤色をした廊下は全てカーテンが締め切っており、そこに日差しが入ることはない。薄暗い廊下には唯一、ロウソクの火が灯り、道が見えるようになっていく。悪趣味だが、吸血鬼が館の主なので、その観点から言えば趣向が凝られているのかもしれない。

コツコツ、コツコツ。

足音だけが廊下に響き、不気味に長い廊下を歩いていく。外見に比べ、圧倒的に長さが不自然な廊下は変わらず薄気味の悪い暗さだ。

コツコツ、コツコツ。



いつまで続くのだろうか、フランには永遠に感じられる。しかし、レミリアの部屋はあと数メートルで着く。この長かった廊下に終止符が打たれるのだ。それは歓喜されるようなものではないにしろ、終わりが見えてくる事は希望を持たせる。

希望は絶望へ変わるのだが、今の彼女にそんな心の余裕は無い。

扉をノックすると、レミリアは『入りなさい』とだけ告げる。フランはそれに従うようにして扉を開け、部屋へと入る。部屋は広く、大きなベッドに小洒落た机と椅子、少しの本棚に申し訳ない程度のロウソク。天井にはロビーと同じようなシャンデリアが吊るされており、窓はカーテンが閉められている。

レミリアは机の上にティーカップを置き、椅子に座りながら入ってきたフランを見る。実の姉と彼女の羽は全然違った。

「どこでも良いから腰掛けなさい。ふふっ、楽な所で良いわよ」

声を掛けられ、ハツとしたフランは、目についたベッドの上、その端に座り、足を少しだけ揺らす。ポスンなんて音を発てながら沈む布は良質であり、毎日洗濯され、良い気分になせながら寝させてくれる寝具なのだ判断出来るだろう。

チラリとレミリアを見ると、彼女は優雅に本を読んでいる。こちらが話し掛けねばなにもしてこないつもりなのだろう。そう言う空気を讀まない性格がフランは少し嫌いなのだ。

いつもは何となく話し掛けて来てはまた何処かへ行ってしまうのに、どうして今に限って話題を振ってこないのだ。

悶々と悶えていても、この沈黙の空間は破られないらしく、音が鳴るのは時計の針を刻む音と、時々、本のページが捲られる紙と紙が擦れる音だ。

外の世界ではそう言うのを『ASMR』と言うらしいが、正直今はそんなことどうでも良い。フランはこの状況をどう打破し、漫画の話に移ろうかと思いを巡らせていた。

「お、お姉様〜…」

「あら、どうしたの。もう黙りはお仕舞いかしら？」

無駄な言葉が一つ多いだけで言葉が喉でつかえると言うのか。

ぐつ、と後ろ手に回ってしまったフランは呼ばなければ良かった、と今更ながらに後悔をする。しかし、彼女は少しはあつた勇気を振り絞り、しっかりと舌を回らせて語り出す。

「お姉様は、この五冊の漫画でならば、どれに興味があるの？」  
言えた、しっかりと言えた！

感激が彼女の心で広がり、無意識の内にフランは自らの羽を上下に揺らす。それはまるで喜んでいいる犬のような動作だ。尾の代わりなのだろうか、生物学的には未々不明な点は多いだろう。

レミリアはそんな言葉を真摯に受け止め、取り敢えずフランにその五冊を見せて貰う。表紙はどれも個性的な絵柄で装飾されており、タイトルが大きく書かれている。

レミリアの好みの絵柄から、中身を拝見して好奇心が掻き立てられるストーリーの構成まで、それは様々な情報が詰まった本だ。これが人間の創作物と言うので、レミリアは外の世界と幻想郷の文明の差を改めて実感する。しかし、それでも幻想郷の方が生き易い。やはり畏れを簡単に得られるのは幻想郷だ。

だからこそ、今回の頼み事を受けてやったと言っても過言ではないだろう。それでもやっぱり悪戯心等が働いたが……。

「貴女が選ぶものが私の選ぶものになるわ。運命はそう告げている：それは変わらない筈よ」

フランはその言葉に困惑した。聞いた意味も無ければ此処まで来た理由すら消えてしまった。時間の無駄だったのだ。だからこそフランは分からない。選べと言ったのに、五個の選択肢で六個目の選択肢を選んでいるようなものだ。姉も子供じやあ有るまい。言葉遊びも大概にして欲しいとフランは顔に出す。するとレミリアは面白そうに笑う。

「ふふつ、そんな顔しないでフラン。貴女は人に聞かなくても分かる筈よ。」

「ほら、もうそろそろ食事でしょう？行きましょう、明日になればきつと貴女は分かる筈だから」

「…何それ」

呆れたように、もはや姉の意見は要らないと決意したのか溜め息を吐いてからレミリアよりも部屋を出る。そこから食堂へ向かうと、既に他の住人は座っていて、最後に来たのがフランとレミリアと言う訳だ。

「遅い、いつまで話していたの?」

パチュリーの小言をレミリアは掻い潜るようにして適当な相槌を乱雑に吐き捨てるようにして呟き、椅子へ座る。フランもまた、それに付いていくようにして座るだろう。

目の前に出されたのは高級レストランのように順序を決めたコースメニューの一皿目だ。

まずは突き出し、アミューズだ。その次、一般的に知られるフルコースのスタート、前菜のオードブル。

オードブルを優雅に食べ終わり、続くスープ、ポワソン、ソルペを終わらせ、アントレ、サラダ、チーズを食す。咲夜が作る食事はどれも高級レストラン顔負けであり、そこに館の住人として誇りを持つ。

紅魔館は幻想郷では珍しい洋風だ。例えば彼女達が今使っているティーカップやナイフ、フォーク、食器。礼儀作法等も、全て洋風であり、幻想郷ではそれなりに浮くだろう。服装は有力者であるならば洋服である。そこら辺りは真相は闇の中と言うもので、何故そうなっているか検討も付かない。

洋風と言っているが何も和風の物が無いわけでもない。例えば食事、今回は洋食のフルコースだったが、和食の時もある。お茶も時々緑茶や茶菓子も和菓子だったりする。和洋折衷とはこの事ではないだろうか。

「さあ、フラン…貴女の『答え』が聞きたいわ」

食後、レミリアのその一言で辺りの視線はフランへと向く。

フランは何も察しが悪い訳ではない。その『答え』が何なのか、もう既に何を求められているのかを理解している。

「私は…」

その答えは

それは近年稀に見る大雨の日だった。

ゴロゴロと雷鳴を轟かし、トタンの壁や屋根に大粒で勢いのある雨粒がぶつかり、少し鈍い音を立てていた。貧民街の何処か人気の無いところ。彼は親友と共に居た。

夜、彼らは昼間に外で遊んでいたが、急な土砂降りですぐ雨宿りをしていたので。どれ程時間が経ったのだろうか。それを測る術はない。ふと彼は隣の親友を見る。

何だか様子がおかしく、彼は親友へ声を掛けた。

「レオリオ？風邪かな……大丈夫か？」

しかし、その声の返事は来ない。その場に立ち尽くし、意識が無いようにぼうつとしていた。流石に心配になった彼は、親友のレオリオの両肩を掴み、揺さぶる。最初はふざけるなよう、なんて面白半分ですくすく揺らしていたが、途中から本当に返事も、視線も合わないので強めにグラグラと揺らす。

何度も声を掛けてもレオリオは彼を見ない。幼い彼は何が起きているのか分からなかった。いいや、きっと誰にも分からないだろう。何故ならば、今のレオリオにはこの世界の理による現象ではない事が起こっているからだ。

所謂それは外界からの干渉。勿論、それを判断するには彼は幼すぎる。いいや、幼い幼くないは問題ではない。きっとこれは誰も理解出来ない領域のナニかなのだから。

人を呼ぼうか、等と悩んでいると、彼は……ピエトロはドンツと強めに体を押され、その場に倒れ伏す。地面は水浸しなのでピエトロもまた当然のように濡れる。しかしそれは土砂降りが降った時点で当たり前前の事なので特に注目すべきところではないだろう。

「レオリオ……？」

「……ああ、この体の名か」

ピエトロのえつ。と言う声は、喉を通らず、その音は彼から発せられる事はなかった。

ピエトロの腹はいつの間にか何かで貫かれたような後と共に大量の出血。貫かれた部分からは内臓等が見え隠れ、ピエトロは何が起ったのか、それを理解するのに少しの時間が必要だった。

理解した時、ピエトロはその激痛に顔を歪め、声を張り上げ、悲鳴を上げた。絶叫。正しくその言葉が今の彼の声にピッタリと当てはまる。

ピエトロ視点による右下腹部の貫通。ピエトロは踞り、息は荒くなっていた。

「れ、れおりお……？」

彼がチラリと見えた彼の親友の右腕は、きつと彼の腹に溜まっていた血で染まっていた。その血と雨による水で、より液体さが増し、タラリと腕から滴っていた。レオリオはピエトロへ冷たく見下すような視線を向ける。その目はピエトロを食料か、それとも単なる石ころに躓いた後にその躓いた元凶を忌々しく見るような目線であった。

子供のして良い目ではなかった。

「そう気安く俺を揺らすな、痴れ者」

レオリオと思われる人物はピエトロの傷を抉るようにして右足で蹴りを打ち込む。揚げ足蹴りだ。

見事ピエトロのまだ新しい傷へ生々しい音と共にヒット、ピエトロは更に嗚咽。しかし、先程の音も発生源であるピエトロのみにしか聞こえてないように、レオリオは構わずピエトロの頭を足蹴にし、グイッグイツと力を込めたり緩めたりする。

「ふむ、試しに来てみて、丁度良いところに実験台が居て、運命はやはり俺の手の内に……ああ。成程。」

「違和感があると思ったら自動で口調が変換されるのか。便利だが威厳に掛けるな…、ん？あ、転移者の意思に合わせてくれるだなんて気の利く道具だわ」

先程までレオリオのような口調が、突然お嬢様口調になる。ピエトロはもはやこれが現実だとは思えないらしいが、彼の腹からの痛みにより、夢ではない事が突き付けられる。段々と意識が遠退いていく中、唯一聞き取れた最後の言葉。

「死んでしまったの？ 脆いわね」

それはかつての親友とは思えない程に薄情で、軽薄で、彼に対して何の感情も抱いてないような声色だった。その後、ピエトロは息を引き取り、その場にはレオリオだけが残る。

レオリオは手足を動かしたり、顔を触ったりしながら、辺りを見渡す。右手は血と雨で濡れており、汚いと思いつながら路上へ出る。豪雨がレオリオへ襲うも、彼は何ともないような様子だった。

レオリオ、否、レオリオに憑依したレミアは思考を巡らせる。

少しの時間で試せたのは主に身体能力と妖力、能力。

レミアが憑依した時に出来るのは妖力の操作が主なものになること。つまり、体をコウモリに分裂させたりは不可能と言うこと。八重歯は普通の人間のもので、体だけが人間になったと言うことだ。

能力も弱体化しており、運命の操作は出来なくなったようで、可能なのは運命の可視化だけだった。運命が糸のように見えており、レミアは舌打ちをする。

しかし、吸血鬼としての身体能力や妖力は精神に依存していたのか、そのまま引き継がれていたようで、何も鍛錬してない子供相手ならば認識するよりも早く腹を貫通出来た。そこは上々だな、なんて満足げにしている。

これがレミアの場合の変化だ。例えば美鈴やパチュリーならばどうだろうか、なんて思う。

「流水に触れても大丈夫なのは新鮮ね」

豪雨に打たれると言うのはこう言う気分なのか、と今まで味わえなかった経験に彼女は小さく感激を表す。しかし、うざったいものもあるのか、試運転と言うが如く、彼女は血で濡れた右腕に妖力を集め始める。

徐々に集まっていく妖力はやがて体外へ放出され、一つの形を成す。紫のような、赤い色をした妖しく光る槍。レミアは神話の武器に例えて『グングニル』と呼ぶ。ごっこ遊びに使うようなものではなく、純粹な妖力の塊。子供の体よりも大きなその槍をレミアは構

え、投擲の構えを取る。

そうして投げられたグングニルは空へと向かい、高い位置で破裂する。そうすると、その勢いと力により、豪雨を降らせ、辺りを暗くしていた元凶の雷雲は綺麗さっぱり消え失せ、その場には、彼女を恐れるかのようにして紅に染まる月と、静かな夜が訪れただろう。

「こんなに月が赤いなら、この人生は楽しいものになりそうだわ」  
背後に残るは過去の友。

その場に残るは狂える少年。

その日、その時、彼の運命は大きく変化したのだった。

あー、もうめちやくちやだよ…。おつ、大丈夫か、大丈夫か？

「私の答え、それは……私は、HUNTER×HUNTERの世界を選ぶことよ」

その日の食堂にて、フランは高々と宣言する。明日、だなんて言っていたレミリアが何故か今答えを求めてきたので仕方ない。しかしながら、その顔はどこか誇らしげで、所謂やりきった感が大いに出ていた。

各々反応が異なり、レミリアはよくやったと言わんばかりに小さな拍手を、咲夜は時を止め、不要な漫画をまとめて食堂の角へ起き、パチューリーは我関せずを極めている。美鈴や小悪魔は楽しそうに目を輝かせていた。

妖精メイド達はこの話に付いていけないのか、頭にはハテナマークが浮かんでいて、飽きたのか忙しく各自の仕事へ戻っていく。つまり、やはりと言うべきか反応してくれる者はいつもの館の主力メンバーと言うわけだ。何だか寂しいと言うか、空しいと言うか、こんな騒がしいのに、騒がしくしているのは二桁にもいかない人数という事実が今更になって突き付けられてる気分である。いや、気分どころかそれが現実だ。

そう、例えるならば明日は日曜日と思っていたら月曜日で永眠したと思うその気持ちは今、フランには芽生えていた。

そこから言うもの、賢者の仕事は早かった。翌日、彼女は紅魔館へ来たと思えば、その手には不思議な陰陽玉と、後ろには彼女の式神が居る。既に食堂の角の漫画は取り上げられていた。流星は賢者と言える。

「お久しぶりですわ…と、言っても、たかだか数日ですけれど」

「あら、そんなに私が愛おしかったの？取り敢えず別れましょうね」

「誰が貴女みたいな吸血鬼と交際するのかしら。興味深い話だけと全



く心が惹かれないから放っておきましょう」

相変わらず犬猿の仲のような会話を繰り返り広げる二人。後ろで呆れる従者と式神。二人は苦労人として友達になれそうだ。

して、二人の喧嘩の様な話は早々に切り上げ、本題へと移る。紫は分厚いクツションの上に割れ物を触るかのような手付きで陰陽玉を置き、その前に簡易的な赤い鳥居を置く。木で作られたそれは一種のミニチュア的な感じで、しかし、とてもじゃないがこの洋風の館には合わないチョイスだった。

「なんだこのヘンテコな鳥居…飾り？」

「そんなわけ無いでしょ、人が話を始める前に予想を語らないで欲しいわ」

「これは神を祀る場所の『シルシ』。神が居ると言う『アカシ』で、この陰陽玉には神が居るの。大切な、大切な大きな存在になる小さな神様。」

「信仰でもさせるつもり？生憎と信心深くない性分なんだがね」

「いいえ？この神には何もしなくて良い。この陰陽玉は使えば、その行為が信仰となり、貴女達を助けてくれるモノになるわ」

要するに使えば使う程ポイントが手に入るキャツシユカード的な役割で、鳥居はカード本体のようなもの。つまり、陰陽玉は精神を漫画のキャラクターに繋げる為の橋渡しの存在。確かに大切だ。紫が割れ物を扱うような手付きになるのも分かる。

良く見れば様々な能力、力等がこの陰陽玉に付与、混ぜられているのが分かる。少なくともこれを割れば紅魔館は爆破出来る力はある。いや、紅魔館だけではない、周辺の霧の湖も、魔法の森も、それ程に強力な力が込められていた。

そして、この陰陽玉の中に神様が居るとのこと。ポイントは信仰心と、またそれとも他の力なのか。使う度に妖力は吸われたくないのだが、とレミリアは不服そうにしていると、紫は見据えたように、そう言う力は不要と述べる。

ただし、彼方（HUNTER×HUNTERの世界）へ行つて、そこで使った力は元の世界（レミリア達の居る幻想郷）に戻ったとして

も消費したままの状態であると言うこと。リセット機能なんて無いようだ。人生そんなに甘くない、と紫の後ろの式神が何やら言いたげにしてそうだ。

神様はまだ形も名もない赤ん坊のような状態らしい。使えば使う程、使うと言う行為で起こる信仰心が糧となり、力を得る。その力はいずれ、レミリア達を助けてくれるようだが、レミリアは強気に「助けなんて不要さ、私を誰だと思ってるのかしら」

と、語る。呆れた様子の紫は何度目かの溜め息を吐き、取り敢えず、試運転を兼ねて誰か行かせてやろうと画策する。紫の口はスラスラと動き、言葉は巧みで、その場に居る全員に聞こえる声で語る。

「さて、一番乗りは誰かしら。一番ならばその世界をある程度研究出来ますし、きつと人間も居ますわ。」

「私は誰でも良いのだけど…」

クスクスと笑いながら辺りを見渡すと、全員が好奇心を掻かれた様子だ。あのパチュリーでさえ、未開の地について多少興味を示していた。

一番うずうずと忙しく動いているのはフランであった。やはり、選んだ身であるし、当然と言えば当然の結果だろう。次にレミリアと美鈴、小悪魔やパチュリー、咲夜は興味はあるが、率先して行かない様子だ。ならば、第一移転者候補は最初の三人に絞られるだろう。

「私はこの館の主、私が行くのが相応しいわ」

「いいえ、お姉様。私が選んだの、このフランドールが！つまり、私に権利があるわ」

「厚かましいかもしれませんが、ここは私が先に行き、安全を確保してきますっ！」

「貴女に守られる程、私は弱くないっ！」

「ひい〜…」

美鈴が先陣を切ろうとしても、レミリアとフランは不服そうに、そして自信たっぷり己の力を誇示する。当たり前だ。門番に守られるなんて、主として、そしてその主の妹として顔から火が出る程に恥ずかしくなる。しかしながら、門番の言い分も理解できる。

何故ならば従者と言うものは主を守り、時として肉壁となることを厭わない者であると、レミリアは常に考えていた。その点、咲夜は完璧に近い。紅霧の際は正直忠誠心はあまり無かった印象はあるが、今はしっかりと懐柔しているとさえそうなる筈だ。流石に鼻から忠誠心なんてことも、レミリア、フランへのセクシャルハラズメント（セクハラ）はしない。良くある別世界軸の咲夜はきつとガンギマリしている。何に、とは言わない。

美鈴は確かに良い奴で、おっとりしていて、やるときはしっかりとやってくれる優秀な人材。だからこそ…

「美鈴、貴女は大切な家族みたいなものよ。それを、未開の地で失うのは途方もなく悲しい。貴女に死んで欲しくないの…」

「レミリアお嬢様…」

勿論、レミリアの策略で泣きそうな真似も追加で行う。ずる賢い？ 何度でも言うが良い。それが悪魔の名を持つ妹が居る者に相応しい性格だろう？あくまでも精神はずる賢く、それでいて気高い、所謂面倒臭そうな性格をしているが、外見はあどけない幼い女の子だ。美鈴は、主の流れそうな（でも流れない）涙を見て、うぐつと心が揺さぶられるような現象に陥ると、渋々、と言うよりも絆されたように辞退した。

その後レミリアに膝から崩れるようにして抱き付いて涙を流していたが、邪魔、と一蹴りされて意識を落とした。南無三！とどこからか聞こえてきそうなオチである。

「お姉様、お芝居はもう終わり？」

「ふふつ、流石に妹には泣き落としても無駄だったようね。」

「貴女ももう495歳か…長いものだけわ」

続いてはフラン、お前だ。

実の肉親に性格はもはや隠せないようなものだ。故に、泣き落としもそれに準ずるものも無意味に終わるだろう。ならば、レミリアは秘策に出る。怪訝な表情を浮かべるフランはレミリアをじーっと見詰めている。

「吸血鬼の大人にも近付いていくでしょうね。未々姉として、気高さ

もカリスマも負けてはいないけれどね」

「駄々を捏ねる姉のどこに気高さがあるのか教えて欲しいものね」

昔の妹は可愛かった。今も唯一の肉親として愛しいが、昔、特に幼かった時よりも皮肉を返してくる。誰に似たのだろうか、たぶんパチュリー辺りだろう。何となく似ている。

しかしながら、同時にフランも同じようなことを考えていた。姉も、昔は優しくかった。今よりもずっと、自分の事を見てくれていたし、気に掛けていてくれたし、ワガママも多少通してくれた。

これが時間の流れと言うものか。姉妹似たか寄ったか、同じように考える。

「お前達は作法を知らんのか？」

「幻想郷つてことを忘れてはいないだろうな？こう言うときは『弾幕ごっこ』で決めるのが筋でしょう？」

「狐ごときに……まあ良いわ。フラン、貴女もそれで文句はないわね？」

「ええ、勿論。お姉様こそ、後で泣いても許してあげないからね」

時刻は丁度夜、つまり吸血鬼の時間だ。正確に言えば人外の時間であるが、そこへ言葉を隔てるものは誰も居ない。二人は外へ出ると、湖の上空で決闘を始めるだろう。

彼女達はもはや、初めの合図すら不要と感じたのか、既に三十メートルは互いに離れていた。各々手には己の魔力で作った槍と剣らしきもの。名を『グングニル』と『レーヴァテイン』と言う。彼女達の代名詞とも言える武器だろう。

こう言うとき、砂漠か何かでは丸い草が転がり、風が吹き、砂が舞っているだろうが、ここは幻想郷。霧の立ち込むこの池の上では、砂も草も無縁のものだ。風は少しだけ吹いていて、しかし全然支障は出ない程度だ。

先に仕掛けるのはフランであった。己の背後で魔法陣を展開し、無数の色鮮やかな弾幕を放ちながら突撃。少し意味は違うが人海戦術、数で押すとやらだろうか。

対してレミリアは受けの姿勢。当たらぬ弾幕に関しては無視、此方へ迫って来るものを槍で薙ぎ払い、完璧な間合いの取り方でフランを見据えながら後退していく。距離を埋めさせない為だろう。長物故の戦術だ。

武器のリーチは完全にレミリアに分があり、フランはその点では不利だ。しかし、火力と言う点においてはフランの方が三枚は上手である。

フランの勝ち筋、それらレミリアに三発程攻撃を打ち込めれば勝てると言うこと。例え強力な吸血鬼だろうと幻想郷トップクラスの火力の持ち主の攻撃を喰らえばただでは済まないだろう。弾幕ごっこと言う縛られた戦闘だとしても、無慈悲にも死亡の理由にはなる。

「逃げてばかりじゃあ勝てないわ、お姉さま！」

遂に至近距離まで追い付いたフラン、その右手に持つ歪な形をした剣のようなもの（レーヴァテイン）を彼女から見て左下から右上へと振り切り、構えられた槍を弾き飛ばそうとする。無力化を謀っているのだろう。

しかし、ただでやられるわけにはいかないレミリアは一度レーヴァテインを槍で受け止め、軌道下へと槍をズラし、受け流すようにして槍が手放される事を回避。そのまま隙だらけなフランの胴体へも槍を貫こうとする。

「残念、やられちゃった…♪」

貫けた、が、手応えがない。レミリアはその時始めて、目の前のフランがフランで無いことに気付く。

禁忌【フォーオブアカインド】

「実に厄介だよ、それ」

「一人がやられても二人が居る、二人やられても三人居る…さあ、お姉さま」

「「貴女がコンテニュー出来なのさ！」」

レミリアに貫かれた分身は霧の一部になったかのように消え、その

代わりのように三人のフランが目の前に現れる。きつと、あの人海戦術もどきのような弾幕に紛れて使ったのだろう。後出し宣言とは我が妹ながら…、とグレーゾーンを走るフランに呆れと少しの楽しさを見出だす。

力のゴリ押し、単純ながらも、使うものが者ならば非常に厄介な戦術となる。それはレミリアのようや緻密な戦略を立てて動くようなタイプとは対局の、脳筋みたいな雑なモノ。それでも、単純ながらも破壊力を誇っても良い。それだけの火力がフランにはあるのだから。

三人の内、一人は弾幕をばら蒔き、レミリアを牽制し、残りの二人は接近。レミリアは上手く距離を取ろうにも弾幕により下手に動けず、その場で素早く動き回るフランを相手にしなくてはならなかった。攻撃され、防御した次の瞬間には、他の攻撃への手を回さなければ回避も相殺も間に合わない忙しさ。思わずレミリアは冷や汗をか

く。周囲を槍で大きく薙ぎ払い、衝撃波を出し、フラン達を少しだけ離すも、また距離を詰められては同じことを繰り返す。これではまるでいたちごっこのようだ。

「ふふっ、フラン。良いことを教えてあげる」

「もしかして降参?」

「それとも時間稼ぎ?」

フランは攻撃の手を一旦止め、レミリアを見詰める。当のレミリアも、この時間で逃げたり何か行動を起こす気の無いように飄々と、堂々としていた。

何が目的なのか、パチュリーだとか、未来予知が出来る能力でもないのでフランには検討も付かない様子だった。

「妹に出来て姉に出来ない事は無いのよ」

その言葉は、フランの耳にしつかり届く。もしかして、いやでも、しかし。そんな思考と仮定と留まらないブレブレな結論がフランの頭を支配する。もし仮に、レミリアが、言葉の真意通り『フランの技、スぺカ』が使えるとすれば、形勢逆転、負けるのは目に見えている。

しかし、それはどうなのだろうか。何の為の『程度の能力』で、何

の為の『個体』なのだろうか。ブレブレな結論の中でも、己の頭の声で一番考えを占めるのは『有り得ない』と言う声で、ちらりもレミアアを見る。

自信満々な様子に、フランの頭の声は少しづつ自信を無くしていき、反比例しているかのように『有り得る』と言う声が大きくなっていく。

「さあ、恐れなさい。貴女の技は私の技であると言うことを！」

### 禁忌【フォーオブアカインド】

高々に宣言されたスペカ。フランは意を決して辺りを見渡すも、レミアアの分身は出てこない。おかしい、隠れたか？と、完全に発動していると感じている。

レミアアはそんなフランをクスツと面白そうに笑い、困惑と警戒による緊張により隙だらけとなった『本物のフラン』へと一瞬で距離を詰め、土がある所へ槍で弾き飛ばすだろう。咄嗟の事に反応が遅れたフラン。立ち上がろうとするも、既に首もとには槍の矛先がゼロ距離で向いていた。

「嘘も方便、ハツタリと言うのも戦略の一つよ、フラン。」

「……参ったわ、まさかスペルカードルールを逆手に取られるとはね」  
弾幕ごっこは大きな攻撃の前、必ずその技名を宣言しなくてはならない。レミアアはそこを逆手に、大きなハツタリをかましたのである。何て事ない、ルールを知らなければただ叫んだだけの行為。良くある気合いによる叫びのようなものだが、それよりも質が悪いのは明白だ。

フランのスペルカードであるフォーオブアカインドを、使えると言う雰囲気醸し出しながらハツタリで、最初からフランの困惑を引き出し、警戒による体が固まる現象（緊張状態では体が動かないアレ）を狙ったのだ。

思った通り、上手くいつてくれたらしく、楽しそうに笑みを浮かべる。

フランを立たせ、レミリアも取り敢えず館へ戻る。そこには先程も居た面々の顔が並んでいて、特に紫は小さく拍手をしていた。他愛ないそれだが、顔には張り付いたような薄気味の悪い笑みを浮かべている。

「おめでとうございますわ、正直、誰が行こうと毛程も興味はありませんが…、取り敢えず参りましょうか。」

「選ばれた世界へと、ね？」

「御膳立ても甚だしい、さっさとしろ、隙間妖怪」

紫との相手は胃痛に続きそう、面倒臭いのか、少し辛辣な言葉で急かす。

食堂に戻ると、既にレミリアを待っていたかのように鎮座している陰陽玉。いや、元々動いていない、置かれた時からずっとそこにある。でも、何故だか待つていた様な雰囲気を感じていて、確かに気配を感じる。動けず縛られているような、しかし、それは自主的で悲しみを纏っていない何かの気配。

まるでフランみたいな気配だ。しかし、この中の誰よりも優しさに満ちている。そんな気配だった。

不思議とレミリアはどうしたら良いのか分かる。無言で近寄り、陰陽玉へ触れる。誰も言葉は発しなかった。

ふわり、そんな擬音が相応しい様子で、端から見れば急にレミリアの力が抜けて倒れそうになった。しかし、倒れはしない。レミリアの背後にはいつの間にか咲夜が居り、支えていた。

レミリアは目を閉じており、眠っているような印象だ。咲夜は近くの椅子へ座らせ、紫を睨む。

「どういふこと？」

これだけの言葉で、紫も藍も、何を聞きたいのか分かる。察しが良くて困ると言うことは無いが、時々思ってしまう。

クスクスと紫が笑っていると、咲夜は苛立ちを始める。宥めるように藍が前に出て理由を語る。

「紫様も、その人間も抑えて下さいよ…！」

「ただ意識が 彼方」 へ向かっただけ、そこに緊急性は殆ど無い。安



心して待っていて良い。何なら彼方の様子も見れるようになっていくわ」

そう言いながら藍が鳥居へ参拝するように一度手を叩くと、陰陽玉から声と共に、レミリアが見ているであろう景色が見えてくる。景色はレミリアの視点なのか、彼方の世界で依り代にしている者の視界から見えるものだった。そこに見えるのは一人の少年が見下され、今しがた腹を貫通されたところだった。

その後、良く知るこの紅魔館の主たる言葉、しかし、声は少年の声色で、空を見上げて語るのであった。

藍はその後、この陰陽玉の使い方を一から十までみっちりとその場に教えたのであった。それはもう密度ぎちぎちに、教師でもそこまで教えないと言う程に細かく……。

---

レオリオは何が起こったのか分からなかった。

気付いた時には親友の死と言う現実を突き付けられ、ても泣けなかった記憶がある。まるで心ここに有らず、と言ったようにただ睡眠して一日を生きている。その繰り返しのような日々を送っていた。

それが第三者からの印象。

彼は『声』に悩まされていた。悪魔の囁きのような、そんな甘ったるいものじゃない。彼は自ら壊れてしまったのか？と悩むが、医者からは匙を投げられた。何も異常が無かったのだ。

つまり、この声は精神的にも肉体的にも異常が無い上で聞こえてくるものと言うことだ。きつとレオリオだけに聞こえる声。『あの日』から聞こえるようになった声だ。まるで頭の中に二人も三人も居るような錯覚で、会話も出来るが、レオリオからの意思は言葉にした方が聞き取りやすいらしい。いや知らないけど。

また、声は日によって変わり、聞こえない日もあった。

良く聞くのは幼いが威厳に溢れた言葉を語る声。次に楽しそうな、好奇心旺盛な声。その他沢山……。

「俺っておかしくなったのかな…」

『いいや、寧ろ正常さ。正しくなったのさ。貴女には分からないだろうけれどね』

ああ、頭の中で木霊する声。幼少期の彼を歪ませるには充分な声。この声のせいで、彼は『あの日』の真実を知る唯一の人間になったのだ。

俺が殺した、俺が…ピエトロを、殺した。

手は今でも変わらない小さな血色の良い手。腕も何も無い、至って普通の子供の手。しかし、レオリオには血で濡れた手と言うことを理解し、時々その幻覚が見えてしまう。無意識にも罪悪感と言うものは幻覚に出てくるらしい。

声は笑い声を上げて、面白おかしく笑っている。悪魔だ、と認識したのはその時からだ。名前は知らない、何故か名前を聞こうとすると酷く頭痛が起こるからだ。我慢しても、名前の部分はまるでノイズが走ったかのように聞き取れない。レオリオは苦悩する。

ふと、時々意識が消えるような錯覚に陥る時がある。記憶がない時だ。その事を聞いてみると、あっさりと答えが帰ってきた。

『貴方の体に乗っ取って、私が行動しているからよ』

戦慄した。そしてレオリオは自らの運命を呪った。何故俺なんだ、何故ピエトロは死んだのか、いや、殺したのか。その答えも返ってきた。

『貴方は選ばれてしまった、あの紅い悪魔の道具にね。諦めなさい、それが貴女に出来る唯一の選択よ』

嫌だ、そう言っても時間は残酷にも進んでいく。彼は自らの体がどんどん変わっていくのを認識している。

成長と、改造。正しくその言葉が当てはまるような、そんな変化の仕方であった。

『ここから先、生き延びる為の修行のようなモノ。お嬢様の為に、私が動き方を教えますわ』

いつの間にか、レオリオはこの悪魔達を受け入れてしまっていることに恐怖した。受け入れている、と言うよりも、指示に従い始めてい

ることに。絆されていることに。

何も、数年、数十年話し、話され、暮らしているような存在を確証もない言葉で恨み続ける事は不可能なのだ。自然と絆されてしまうようなものだった。

『この世界には私の専売特許みたいなモノがあるみたいね！何でしたっけ？念？気と何が違うのか分からないや…』

逃げられる訳が無かった。仕組まれているかもしれない。それでも、彼に逃げると言う選択肢は無く、意思を持つ道具として成り下がるとしか道は無かった。

乗っ取られた時の記憶はない。何をしてるのか、何をされてるのか、どうしているのか、彼は知らない。

『安心してよ、私は別に狂った人形に興味はないわ。誰も居なくなるような世界、気になりはするけどね』

ナイフ、剣、槍に謎の力。気付けは彼は人外になったのかな？と疑うように様々な武器、本、嗜好を持っていた。

不思議なのは『魔法』だなんてメルヘンチックなものが自らの手から出たときだった。その時だけはテンションが上がった。絵本のよくな存在が実際にあって、それを使って、舞い上がった。

武闘にも手を出していた。声の一つが、そう言うことが得意なのか、レオリオにも教えてくれた。

また、紅茶の淹れ方や料理、つまり家事一式も声に（手は無いが）手解きを受けた。まるで従者だ。

本の読み方、文字の読み方も教えてもらった。効率の良い勉強方法は役に立った。

人体の弱点の位置も知った。どこをどう壊せば死ぬのか、槍の使い方、剣の使い方、ナイフも武闘も魔法も。

十八歳になる頃には上達していた。

「なあ、何でハンター試験を受けなくちゃあならないんだ？」

『それが運命だから…あとは普通に暴れたいでしょう？』

そんなことはない、と思いつながら手元でナイフを弄ぶ。自分は未だ弱い。弱くなければこんな声なんかには翻弄されず、親友を失う事はな

かった。だからこそ、弱い。

実際の所、レオリオは既に強い。しかし、それに気付かない謙虚な心。また、無意識に洗脳されているのか、殺すことに抵抗は消えていた。

どこぞの暗殺者もビックリな洗脳教育である。魔女と自称していた声が『生き物は全部研究対象』と言って、彼に解剖やら殺傷やら、言うのは簡単だが中身は鬼も裸足で逃げるような事をしていたからだろうか。

血と言うものになれていた。けれど、それでも、まだ時々右腕は赤く染まって、罪悪感が消えていない。

それどころか、殺していった者の魂と言うか、悪夢のようなものを時々見るようになった。そこには特徴的な五人（時々六人）がレオリオを見下し、糸で操る夢だった。

見渡す限り闇により黒く、暗い。スポットライトを浴びているように、そこだけ明るく、糸が反射できらきらと輝いているのだ。

夢でも鮮明に覚えていて、そこで殺してきた者達に責められながら、またその責め立てる声を消すために殺していく。止めて、嫌だ、もう無理だ。そんなことを言っても、行為は終わらない。糸が切って、刺して、燃やして、殺して殺して殺して、その場に誰も居なくなるまで続くからだ。

最後の一人を殺したら、五人の悪魔みたいな存在は笑いながら、レオリオの糸を切って、闇へ落としていく。地面なんてない、底無しの沼のような所へ落下していくのだ。そしていつも、沼に落ちきる前に目が覚める。

落ちてしまったら、どうなるのか。

底無しの不安がいつも目覚めに襲ってくる。それでも睡魔は来るし、低頻度な時々であるから、普通に眠れる。酒も薬は最悪のセットなのでやっていない。やるなら片方のみだ。

そして、十九歳の年、彼はハンター試験を受けることになる。そこでの波乱な出会いは、また彼を大きく進ませることになるだろう。

(慈悲は) ないです。理不尽はあるけど(くず)

ハンター試験当日。いや、当日と言うのか、前日と言うのか、船の上では日付感覚と言うのがどうにも可笑しくなるらしく、ぐらぐらと揺れる船と、その船に当たる波の音だけで飯を食うような生活になっていた。

船はお世辞にも豪華とは言えない普通の船で、その中には屈強な男が沢山居た。異彩を放つのは華奢な体つきをした金髪の青年と元気潑刺な子供だろうか。レオリオは屈強とも華奢とも子供とも言えない、普通の一般人のような見た目。黒スーツにアタッシュケース、それもまた浮いていると言う自覚はない。

暇潰しにもならない本は有名な哲学者の本らしく、人間の在り方を記していた。しかしながら、レオリオはそんなものに興味はない。何故読んでいるのか、床に落ちていたからだ。好奇心とやらである。数時間は頑張つて読んだが、やはり興味が無いものをやり続けると言うのはある種、拷問に近い。それ故か彼は元にあつた場所へ本を投げ捨て、ふて寝するような体勢に入る。

しかし、それは頭に響く『声』が許さなかった。

『本を捨てるなんて、私はそんな風に扱えと教えたつもりは無いのだけれど?』

「(元々捨ててあつたんだ、悪くねエだろ)」

『いいえ、例え捨ててあつても拾つたならば貴方の私物よ』

チツ、と舌打ちしながら、体を起こし、本を拾う。ついでにアタッシュケースからライターを取り出し、そのまま窓側に行く。因みに今の会話は思考によるもので、端から見れば突然起き上がってライターと本を手を持った男と言う印象だ。

スラリとした立ち姿、レオリオは高身長 of 男性に位置するの、足は長く、それでいて細い。フケ顔なのが難点だ。とてもじゃないが十九歳には見えないし、来年二十歳とも思えない。若く見積もつても二十六歳はとうに越えてそうな見た目である。

そんな彼は窓側で、ライターで火を灯すと、本に近付き、お察しの通り放火。本は乾いていたのかぱちぱちと火花を外へ出しながら燃えている。船には燃え移らないようで、しかし焦げ臭い「におい」が鼻につく。有機物を焼くときに出てくる黒煙が上へ登り、空へ上がっていく。室内にも風のせいで少しだけ入るのか、その部屋に居た男達は顔をしかめる。

赤く燃えていく本は、時間と共に一度は火が消えていくので、レオリオは再度ライターを近付ける。頭で文句を垂れ流している声が聞こえるが無視し続ける。そうしていると、いつの間にか声が消えており、そのまま燃えカスは海へと落ちていく。だいぶ燃えてきたので、彼はそのまま本を海へ捨て、上を見る。

天気は良好、カモメが飛んでいた。憎たらしい程に晴天で、暑いと言えば暑い。少しくらい雨が降ってきても良いのに、と内心で毒づいていると、部屋の扉が開いた音がした。

人間の本能なのか知らないが、レオリオは音のした方へちらりも顔を向けると、そこには緑色の服を着た元氣そうな子供が居た。こんな船だと相当外見で存在が浮くので、その子供の事はレオリオも認知している。

「ここら辺かなあ…あつ、おじさん！何か焦げた臭いしたんだけど、気のせい？」

「甲板か他の部屋まで届いてたか」

「すまん、と適当にあしらい、本を燃やしていたんだ、と軽い説明をして子供から視線を外す。面倒なのだ。」

しかし、子供は残酷にも好奇心旺盛な生物で、何で？どうして？もいちいち理由を求めてくる。

鬱陶しいぞ、と視線で訴えても、この子供の視線は純粹無垢なもので、キラキラと輝かせていた。

『教えてあげなさいよ、暇なんでしょう？』

「うるさい、教えても無駄ってのが分からねエのか…つと、すまねえ。考え事が言葉に出ちまった。」

「ううん、良いよー俺、ゴンって言うんだ！」

「ねえ、おじさん、なんで本を燃やしてたの？」

自己紹介も何も求めてないのに勝手にしてくるとか、どんだけコミュニケーション能力カンストしてるんだ、この子供、改めゴンと言う人間は。と、ため息を吐きながら重々しく思う。

ゴンはレオリオを見詰める。船が揺れるも、他の屈強な男達とは違い、身動き一つもしなくても体の軸がブレないその姿勢、隙だらけそうに見えたスーツ姿に、実は全然、一度攻撃すればこちらが殺られる、隙なんて全くない男。野生の勘ながらに、鋭く気付く。

「行動一つにちゃんとした理由が必要なのか？」

口を開けばひねくれた事を言うものだ、と何となく小さな自己嫌悪。けれども堂々とした立ち振舞いはレオリオらしい。初対面ながらに、ゴンはレオリオの性格の一端を既に掴んだ気で居た。昔から人間観察は得意分野に入る。

ちらりと横目でレオリオを見る。こんな子供がハンター試験に行くとは思えないが、世界は広い。つまり、有り得なくはないのだ。残酷な事に、ハンター試験は数百、数千万と言う世界の人口から見れば少ないかもしれないが、それでもスケールは大きいと思える程の人間が挑み、脱落してしていく試験。こんな子供が、と先程から思っている通り、合格するとは思えない。

年によつては合格者が居ない事例もある程だ。何と比べてるのか自分でも分からないが、何故か何かと比較しながら目の前の子供を見る。底無しの明るさが優しさとなり、優しさは甘さとなり、命取りになりうるゴンの性格。

「(つくづく、神様つてのは平等性に欠ける)」

内心で居るかも分からない神仏へ毒づきながら、気付けばレオリオが聞いていないだけで、あーだのこーだの語っていたゴンが居た。再度、レオリオは溜め息を吐くと、突然ガコン！と大きく船が揺れた。

何事か、とさてもそこまで慌てないが、それでも自然に振る舞うように心掛けて居ると、甲板から嵐が来た！なんて声が聞こえてくる。良く見てみれば晴天だった空の向こう側(丁度進行経路)に薄暗く、分厚い雲が空を覆い、ゴロゴロと雷の音がする。波も段々も進むにつれ

て大きく、荒々しくなっていた。

面倒くせ、と内心思いながら、ふと倒れてないか心配になった隣の子供を見ると、特に何事もなく立っていた。他の屈強な男達は既にギブアップ、船酔いしていた。

ゴンはそんな男達に気付くと急いで近寄り、看病を始める。優しい子供だ、とつくづく思う。

『(貴女も行かないの？医療の道に進みたいのでしよう?)』  
「分かっている癖に良く言うぜ…」

そう、レオリオは昔から医者を目指していた。しかし、夢を追い掛ける事も許さないのがこの声なのだ。

声はレオリオを束縛し、修行と言えば体は良い、拷問に近い日々を送ることを強制させた。生傷はあまりない、何故ならば魔法と言うものがあるからだ。

何回死ぬ思いもしたのか分からない。致命傷を受けても、魔力を高める云々と言って魔法と自然治癒だけで済ましていた。家なんてもない、親も流行り病で亡くなった。彼には何も無い、天涯孤独と言う道だ。

きつと、魔女と名乗る今の声は嫌味や皮肉を込めていたのだろう。証拠に少しだけ声が笑っていた。

ゴンが此方へ来ようとする、しかし、それは船の揺れで遮られる。  
「(おいおい、少しくらい雨が降ってくれりやあ良いと思っただが、嵐は呼んでねえぞ…)」

「おじさんは船酔い大丈夫なの?」

「船酔いが大丈夫じゃないなら最初からハンター試験なんて受けねえよ、お前さんは?」

大丈夫!と言いながら親指を立て、ニカツと笑う。純粹無垢が心に染みて何故だか痛くなる。何を今更そんなこと、と自虐地味にしていると、また大きく揺れた。

さて、今ので何人またギブアップしたのかな、と少しだけ面白く笑みを浮かべていると、一旦嵐は抜けたと伝えられる。

外を窓から覗いてみると、確かに抜けていた。しかし、まだ先にあ



る、先程よりも大きな暗い雲がここから見えるだけでも広範囲に広がっていた。

部屋の中の男達は勘弁してくれ、と弱音を吐き、この時点で試験を受けられる人間は少なくともレオリオもゴンで確定していた。他の部屋の様子も見に行こうとして部屋を出ようとする、扉の先には船長が居た。

「俺についてこい」

それだけを伝えられると背を向け、歩いていく。レオリオとゴンは互いに見詰めると、意を決したように後へついていく。

時々船が揺れるも、二人は特に何事もなく歩いていく。ゴンは背中に釣竿を、レオリオは左手にアタツシケースを持っており、端から見ても彼らの手荷物であると判断出来る。

船長が入った部屋はこの船で比較すればそれなりに綺麗な部屋で、中には既に金髪の青年が居た。それ以外の人間は船員しか居らず、三人の受験者が集まった感じだ。曰く、この三人が287期ハンター試験受験者として相応しいと判断されたらしい。

「お前さん達は何故ハンターを目指す？言っておくが、わしも試験官の一人……虚偽や気に入らない理由なら落とす！」

何たる横暴。しかし、それでこそ自由なハンター協会に居てもおかしくはないとレオリオはひとりでに納得する。対してゴンは何が何だか分からなそうに首を傾げ、奥の青年は冷静にこの場を判断していた。

『貴方は何て言うの？』

「(考えて無かった:)」

順番は正直知らない。とにかく二番手が丁度良いと思い、レオリオは内心で『最初は俺じゃありませんように！』と願掛けをする。そう言うのは一週間程度前から前から毎日神社に御参りをして初めて言える願掛けでは？と言われればそうだが、今は神社もない、ましてや出店もない海の上。御参りなんて論外だ。

「オレはゴン・ハンターになりたい理由はプロのハンターである親父を見付けて一発ぶん殴りたいから！」

「アホかお前！」

「えー、なんでよ〜」

ついツツコミを入れてしまうレオリオと、口を尖らせて不満げにしているゴン。こんなのと一緒に今年の試験を受けるのか、とハンター試験の低民度さに思わず呆れてしまう。いや、実際はこんなのも受験するののか、と言う感情だ。ハンター試験は先程も確認した通り、云万人の人間が受験するも、合格は片手で数えられる程度、多くて両手だ。そんな超難関に、父親を殴りたい、それだけで来るなんて馬鹿も大概にしろ！と言いたいが、既にツツコミをいれてしまい、そこからの言葉は冗談を越えてしまうだろう。

故に口を閉ざすと、船長は一言二言言った後に、レオリオを見る。何かを察したレオリオは遠い目になっていた。

「じゃあ次はサングラスの兄ちゃん、言ってみろ」

「オレにアホって言うんだ！ちゃんとした理由なんだよねっ！」

『ふふっ、どんな理由を言うのか楽しみだわ』

「てめえは黙ってる！場違いにも程があるだろ！」

最後の声にレオリオはつい反応してしまう。そりゃあそうだ。レオリオにしか聞こえず、しかもそれはとても愉快そうにしている、レオリオの神経を逆撫でするものだからだ。ゴンと船長は突如声を荒げたレオリオにビツクリするが、レオリオは小さく謝罪をしてから居心地の悪そうな雰囲気を出しながら先程適当に考えた理由を述べる。

「レオリオだ。レオリオIIパラデイナー。」

「ハンターになりてえのはぶつちやけると金さ。金があれば何だつて出来る。人も関係も物品も、金があれば手の平さ。」

妥当で当たり障りもない理由だろう。我ながら即興で良く考えられたものだ。レオリオは内心で自画自賛していると、隣の青年が呆れた口調で『品性は買えない』と語る。またしても精神を逆撫でされたレオリオは若干苛つき、言葉で噛み付こうとしたが、クラッと一瞬意識が飛ぶ。立ち眩みだろうか、少しだけ後退りしたレオリオは、不意に口を開く。

『じゃあ、お前はさぞ立派な理由があるんだろう？品性も金を掛けれ

ば取り繕えるが…、まあ、興味はない』

突如として纏う何かを変えたレオリオ。何かが違う。先程まで、少しだろうと関わりを持ったゴンは分かる、これはレオリオではないと。しかし、外見も何も変わっていない。ただ漠然と目の前のレオリオはナニか違う。確証も持てない勘だけど、ゴンは確信していた。

「私の名はクラピカ。クルタ族の生き残りだ。動機は一族の復興と、破壊した者達への復讐だ。復讐は、ハンターと言う役職が一番近道と感じたからだ。」

淡々と、しかしどこか悲しみを含む声色はクラピカの生涯を表していた。何をしていたのか、聞くのは野暮であろう。船長はちらりとクラピカを見て、次にレオリオを見る。レオリオは小さく拍手していた。クラピカはその拍手に反応し、レオリオを見る。見る、と言っても無意識に睨んでいる彼は、小さく笑うレオリオの様子を伺う。

『何と言う喜劇。お涙頂戴の慈悲でハンターになろうと言うその心、きっと俺の友人は氣に入らるだろうなあ…。チープ故の陳腐な理由、面白かったらありやあしない。』

クラピカは違和感を覚える。まるで違う言語を不馴れな翻訳で強引に文章にしたような違和感。しかし、それ以前に喧嘩を売られたと確信したクラピカ。彼らの間には見えない火花がバチバチと飛んでいる錯覚が、船長には見えていた。ゴンは能天気眺めている。

ギスギスした空間で、口を開くのは喧嘩を売られた側のクラピカ。「君は品性どころか人として大切なものまで買わねばならないようだね。市場は無いが、私が買おう。どこで買えば良い？」

それは暗に、受けて立つと言う決闘の受諾で、レオリオは好戦的に笑う。しかし、突如として驚いた顔をする、また違う雰囲気を感じ、レオリオは醸し出す。そう、レオリオの中で今、パチュリーからバトンタッチで乗っ取っている者が変わったのだ。

勿論、クラピカもゴンも船長も、そんなことは露知らず、その呆気ない様子を眺めていた。

『背水の陣だ、甲板つてところに行きましょう。大丈夫、別に海が見たいって訳じゃあない。たぶん！』

「…あ、ああ。わかつ、た？」

突然の態度の変わり様に、クラピカは若干引き、同時に困惑する。打って変わったレオリオ。最初は言わば根倉、皮肉屋、そんな感じの印象だったのだが、今は明るい気さくな感じの印象である。明らかな真逆。

どうしたものか、とレオリオを見ていると、彼は突然前屈みで座り、ううくと唸り、愚痴を溢しはじめた。

『と言うよりも突然過ぎますよ、本当！たまたま近くに居るからつて、引っ張つてこつち送つてきますよ！普通!!』

『幾らお嬢様のご友人であろうと、横暴よ、全く……まあ？それが友人としての在り方みたいなものですか？仕方無いとは言えるけどさあ…、私だつて暇じゃあ……暇だっただけども……むう……！』  
「そ、そうなのか……？」

レオリオの口調は一般的な男、粗悪で、しかし根は優しいと言うことが分かるものだ。しかし、今の彼は、砕けた敬語の女言葉。一人称も俺から私へと変わっている。

船長は驚き、なんだこいつ!?!と言った視線をレオリオに向けている。ゴンはさつきまで勘だったものが確信に変わるが、それでも変な人を見るような目だ。変わり過ぎている。クラピカは良く分からず相槌しかうっていない。

そんなレオリオ、改め美鈴は内心で先程の出来事を思い出していた。

紅魔館の食堂。そこではもしもの時があつた場合、と言つて陰陽玉の近くは必ず二人以上居なければならぬと言うルールを決めた紅魔館の一同。本日はパチュリーと美鈴が居たらしい。

パチュリーは楽しそうにしていたが、突如陰陽玉へ触れ、依り代へ精神を預けたのだ。どうしたんだろう、と美鈴が思つて近くで待機している、突然目覚めたパチュリーに手を引かれ、半ば強引に陰陽玉へ触れてしまつたのだ。

えっ、と驚き、しかし、意識は沈む一方で、最後に聞いた言葉は

“後はよろしく”

である。全く遺憾だ。その場の雰囲気を感じ、何があったのか察した美鈴は、こんな予測を立てる。

パチュリーは面白い言葉に売り文句ならぬ、きつと目の前の青年（クラピカ）へ喧嘩を売った。しかし、パチュリーは生憎と武道系ではない、魔法使いなのだ。だからこそ、面倒臭がつて美鈴へ押し付けた。大体は合っている。

悔しそうにレオリオ（in美鈴）は立ち上がり、地団駄を踏むと、クラピカの方へ向き

『取り敢えずさっさと行って終わらせるわよ』  
と、言い、部屋を出る。

その場に残るのは地味に喧嘩を買ってしまったことを後悔しているクラピカと、何が何だか分からない船長、取り敢えず立ち止まっているゴンが残っていた。

クラピカは溜め息を吐き、甲板へ行こうとすると、不意に扉が開き、問題を起こした張本人であるレオリオが現れ

『どこから甲板へ行けば良いんでしょうか…』

あはは、と苦笑いしながら道を訪ねてきていた。クラピカは呆れ返っていた。

甲板。激しい雨が降り注ぎ、波は荒れ、船は絶えずその波に揺らされる。時々打ち付けられた波が甲板へ入ってくるが、揺れて海へ返っていく様は、正しく嵐のど真ん中に居ることを改めて実感させられる。甲板の真ん中には二人の人影、壁際、部屋へ続く扉の前には、また二人の人影が、その真ん中に居る人間二人を見守るように視線を其方へ向けていた。

向かって船頭側、そこには長身で自信有げに立つ男、レオリオが。反対の部屋側、既に二本の木刀を各々両手に構える金髪の青年、クラピカが。

何てことない、普通の決闘。普通の喧嘩のようなもの。

しかし、クラピカは己の部族を侮辱されたと思い、その怒りを糧に立っており、対してレオリオは売った喧嘩の精算をするために。各々が重く、そして軽い理由を持ち、対峙する。クラピカは目の前の男を見据え、改めて隙がありそうで無い立ち振舞いに、大口を叩き、挑発してきただけはあると認める。彼の手には何も握られていない為、肉体を使う接近戦を得意とするのだろうか、と予測を立てていく。

ゴロゴロと遠くで雷が鳴る。更に天候は酷くなると船長は叫び、止めろ！と止めようとするが、二人の耳は聞き流し、戦闘体勢に移る。

レオリオは腰を落とし、右手を前へ伸ばし、じつ、とクラピカを見詰める。クラピカは二本の木刀を強く握り、内心で己を鼓舞、体を奮い立てるだろう。

先に動き出したのはクラピカだった。合図はない、正々堂々ではないが喧嘩と言うのはそう言うものだ。足場の悪さなんて無いように真っ直ぐ進み、木刀の間合いへレオリオを入れれば左の木刀を右から左へ横一文字に振り、右の木刀を、その逆の軌道で振る。真剣であれば、仮に攻撃を受けたとすると、胸部と下腹部が切られ、致命傷になる軌道をしている。ミシミシとクラピカの持つ木刀の取っ手部は悲鳴を上げている。それほどまでに勢いと力を込めた一撃であった。

『甘い！』

しかし、何もレオリオは棒立ちではないし、美鈴として、門番の誇りを持っている。たかが十数年生きた青年に負けるほど、落ちぶれてはない。

レオリオは彼が走ってきたその初動から、今までの経験により攻撃を予測、レオリオからして右から来る木刀の軌道を伸ばした右手手首をしならせ、下から上へと弾き、続いて右から来る胸部狙いの横一文字の木刀を、先程弾いた右腕とは反対、つまり左腕を上へと上げ、弾く。レオリオの左腕は大袈裟に動き、後ろへ回るように円を描きながら弾いたらしく、その大袈裟な動きは無駄ではないのか、クラピカの右手は木刀を落としはしないものの、結果として右に大きな隙を作ってしまうことになった。

クラピカは隙を突いてくると思い、弾かれた左手の木刀を素早く右

腹へ動かし、防御しようとするが、レオリオはそのクラピカの左手首を、右手で掴み、捻りあげる。

「ぐあっ…!!」

強めに捻られたのか、クラピカは思わず声をあげ、左手の木刀を落としてしまう。怯んだ隙に、レオリオは溝尾へ右貫手を打ち込み、同時に右足でクラピカの左足を引つ掻け、足払いをし、掴んだ手首を引つ張り、押し倒すだろう。

クラピカは地面に押し倒され、呻き声を上げるが、背中を上へ向けていたので、レオリオはその上に馬乗りとなり、掴んだ手首をグイッと後ろへ引き、左足で残ったクラピカの左手首を踏み、左手で首筋を持つ。完全に固めたのだ。

『「こんなものね」』

鮮やかな手腕、確かな実力。この間、十分も時間は経っていないかった。ふう、とレオリオは成し遂げたように満足げで息を吐き、降参しろ、とクラピカに伝える。

しかし、反抗心からか、屈辱からか、ヒートした冷静ではない思考は

「断る…っ!!」

と、怒気を孕んだ声で拒絶した。

呆れたように、わざとらしく『やれやれ』と言いながら、彼は掴んでいた手首を更に後ろへ引き、改めて口を開く。

『降参しなければ、貴方の右腕を脱臼させる。それでもしなければ手首を折り、骨折させる。もし、それでもまだ降参しないならば…』

私は貴方の首を折るわ。

残酷に、しかし呆気なく告げられたレオリオの言葉は、クラピカの戦意を損失させるに足りた。クラピカの力んでいた体は徐々に力が抜けていき、最後は『降参だ』と呟く。勝者が決定した瞬間である。にこり、と笑みを浮かべてレオリオはクラピカを解放しようとする。

しかし、その瞬間、船が先程までの揺れと大きく差をつけ、より激

しく揺れた。

ばしやん、と大きなものが水に入る着水音が不思議と響く。そう言えば、この船は外で舵を取ったりするタイプの船だ。ゴンは咄嗟に船から身を乗り出し、海を見る。すると、そこには空気と化していたが、確かに船を動かしていた船員数名の姿があり、溺れていた。

「助けてくれ！」

「誰か！死にたくないっ……死にたくない!!」

「苦しいっ、寒い、怖い……！」

そんな声が激しい豪雨と雷の音と共に聞こえてくる。船長は驚いた顔で見る。帆を引こうとしたのだろう、しかし、暴風は無慈悲にも彼ら船員を吹き飛ばし、帆のロープを手放せてしまった。

船長！船長！助けて下さい！そんな声が聞こえてくる。きつと、レミアがレオリオの体を乗っ取っていたならば、愉快そうに笑い転げていただろう。美鈴は紅魔館でもそれなりに良識はありと自負している。しかし、それでも妖怪には変わりなく、ちらりと横目でみても部屋に戻ろうとする。

そんな様子をクラピカは見て、声をあげた。

「おいレオリオ！どこへ行くんだっ!!」

『どこって……部屋だけど』

「この状況で部屋に戻ろうとするのか?! 品性も！人間としての感情も！道徳心も!! 貴様には無いのか、答えろ、レオリオオっ!!!」

迫真過ぎるその言葉は、確かに聞こえてくる。しかし、レオリオの、美鈴の心には響かないようだった。

何故ならば、人間と妖怪の価値観がまず違うからである。仮に同じであったとすれば、助けようとしたかもしれない。しかし、どんなに綺麗な言葉を投げても、体は人間であろうと、その心の本質は既に穢れた妖怪そのもの。

彼女に響く筈がないのだ。

『人間でしよう？一人や二人居なくなつたところで、誰も何もしないわ。森の中の木が一本消えても、貴方達は気付くのか?』

『人間の社会はたかが人っ子一人消えても動く。何の問題も無いで



しよ!」

「……っ、私が馬鹿だったよ! ゴン、手伝ってくれ、あの人達を助けよう!」

ゴンとクラピカは、船長と残った船員で共に助けようと努力している。対してレオリオは馬鹿馬鹿しいと思ひ、船の扉の取っ手に手を掛けた。しかし、動かない。

扉が反発していたり、誰かが閉じている訳ではないのだ。そう、扉が動かないのではない。

レオリオの体が、扉を開け、部屋に戻ることを拒絶しているのだ。丁度その時、ゴンは身を投げ出し、固まって溺れていた船員達へ手を伸ばす。キャッチしていたが、そのままゴンも落ちようとし、その足をまた、クラピカがキャッチしていた。

当然、四人分、子供が一人混じったとしてもクラピカが支えられる訳もない。しかも追い討ちとばかりに手首を捻られ、負傷している。クラピカの身も海へ落ち、五人仲良く海の藻屑になろうとしていたその時、クラピカの足を力強くキャッチする人間が居た。

「勝手に、てめえらでカツコつけてんじゃねえよ!!」

「勝手に、死のうとしてんじゃねえよ! 夢見が悪くなるだろうがツ!!」

「レオリオ……!」

「ッさん」を付けやがれ、年下共!

鍛えられたその足腰、そして腕は、体勢的に容易とは言えないが、確かにゴン達五人を引き上げていく。レオリオは息絶え絶えであり、肩を動かし、息をしていた。

ゴンもクラピカは互いに見詰め、そしてその視線をレオリオへ向ける。疲れ果てたようなレオリオ。そんなレオリオへ、感謝と芽生え始めた友情と言う関係を持つ、ゴンとクラピカが飛び掛かり、互いに抱き合った。

レオリオは意識を取り返したのだ。あのとき、あの瞬間、美鈴の精神を上書きするように。偶然だろう、奇跡だろう。けれども、レオリオは一度勝ったのだ。全貌も知らない、悪魔の囁きをする声の意思に、自らの力で立ち上がり、体の自由を得たのだ。

まるで喜劇のような結末。しかし、そんな彼らの意思とは裏腹に、彼らの知り得ぬ場所でまた運命は複雑に絡み合っていた。

「美鈴、それって本当なの？」

「本当です、まさか精神が押し返されとは思っても無くてですわ…えっと…、それで…」

「ハッキリ言いなさい！」

「はい！お嬢様、これって結構不味いのでは？」

レオリオの思わぬ反撃、つまり精神の上書きのようなものをされ、幻想郷へ帰ってきた美鈴は、真っ先にレミリアへと報告した。最初は耳を疑ったが、従者が嘘を吐くとは思えず、少し考えに耽る。

これは後で紫共々に連絡でもしようか、いや、しかし…と悩みに悩むレミリア。だが、その悩みも不敵な笑みを浮かべると、吹っ切れた様子だ。

「別に不味くはない。何なら、刺激的で良いんじゃないかしら。」

何も、彼女達の声に従うだけの傀儡は要らない。楽しむ、その観点において、今回の報告はとても有意義なものだ。少しくらいワガママで反抗してくる依り代もまた面白い。レミリアは今後の運命にまた期待を膨らませていた。

「それはそうと、たかが人間に精神が負けた美鈴は、今晚夕食は抜きね」

紅い悪魔の館に、悲痛な叫び声が響いた。

うー☆うー☆、あのさあ…（勝手な行動は）してはいけない（戒め）

船旅にもそろそろ終わりが見えてきたのか、船頭の向こう側には陸地が見える。栄えてると言えば栄えてるのだろう陸地は、彼らの向かう行き先であった。

レオリオはそんな現実逃避をしていたが、ゴンにスーツの裾をくいくいつと引つ張られ、我に帰る。正直、今回のハンター試験で友好関係も何も築こうとはしなかった。しようとも思わなかった。

しかし、現実にはレオリオに友人を作ってしまった。今すぐにも突き落とす拒絶してやろうか。けれど、そうしたら今度こそハンター試験は受験前から落ちるかもしれない。なんてったって試験官の船長がレオリオ達の事を監視している風に眺めているからだ。居心地が凄く悪い。

あれから少しの間、互いに生きていることへの感謝をするかのようにな、美しき友情の抱き合いをしていた。抱擁の意であり、そこに意味深なアレコレはない。所謂ハグと言うものだ。

その後、いざこざのあったクラピカとレオリオは、固い握手を交わして今までの事を謝罪した。和解と言うものだ。その場の流れと雰囲気的に、レオリオは握手を断ると言う選択肢は頭から抜けていて、和やかな時間が流れていた。実際は嵐のど真ん中でやっていたので、何も知らない船員はハラハラと心臓が落ち着かなかっただろう。そんなことはどうでも良い。

因みにレオリオの敬称付けだが、本人が水臭いと言い、その話は消えた。そもそも、あれも咄嗟に言った言葉で、そこまで強要するものではない。ただ、あまりにも舐められて居ると判断すれば強要させる。当たり前だ、流星に年上の威厳とやらは失いたくない。

船長はその後、ドーレ港へ行くと告げ、レオリオとクラピカの喧嘩を不問とした。船員を助けてくれたのもあるが、何より船長の気分は

良く、気に入ったからだ。

三人は各々手を叩きあつて喜んだ。余談だが、船酔いでギブアップした残りの人間はまだ立ち上がる気力も何もないのか、未だにぐったりしていた。

そんな訳で数日。どうやら試験の日は先だったらしく、やはり船の上、海の上では日付感覚も狂うと思つたレオリオ。そして横に並ぶのはゴンとクラピカ。彼らはゴンの『セーのっ』と言う合図で船から降りる。どうやら一緒に、同時に船から降りたかつたらしい。クラピカとレオリオは若干人の目もあるのか恥ずかしそうにしていた。

「俺がやれるのはここまでだ！おめえら、達者でな！」

「うん、ありがとう！船長さんのこと、オレ、忘れないよ！」

「嬉しいこと言つてくれるじゃねえか…、頑張れよ！んじゃあ、おめえら！いくぞ、出航だアー!!」

三人は乗せてくれた船の出航を見送り、見えなくなるまで手を振つた。感謝からか、それとも道のりで既に波乱な試験に挑むと言う決意の表れか、三人とも、手は強く、大きく振られていた。

船長含めた船員もまた、別れの言葉を大きな声で言いながら、甲板から身を乗り出して手を振り返してくれた。全員笑顔だが、別れ惜しいのか若干目尻にキラリと、光が反射するような何かが見えたが、それを指摘する人は誰一人として居なかつた。

『楽しそうね』

「(中々良い人だったからな…)」

日常と化したレオリオの頭に響く第三者の声。本日はメイド長のようだ。レオリオは名前を知らない、けれど、メイド長こと咲夜は知っている。そんな歪な関係。

目を閉じ、最後になるかもしれない潮の匂いと波の音を満喫していると、既に先へ行つてしまつたゴンとクラピカがレオリオへ声を掛ける。

レオリオは笑みを浮かべると、他愛ない言葉を言い返しながら楽しそうに後を追い掛けていった。出来てしまつた縁、切るのも勿体無い。ならば、今この時だけ、楽しんでもバチは当たらないのではない

だろうか…。

三人はその後、経路を決めていく。楽しんで行きたいが、生憎とこの人混み。この人混みの殆どがハンター試験受験者と言うのだ、どれほどの大試験か改めて突き付けられ、心が奮われる。

「バスは止めておこう」

不意に、クラピカがそう述べる。ゴンが理由を聞くと、二つあると先に断りを入られた。

一つ目は単純に人が多いからである。バスの停泊場には沢山の人間が居て、大売りショッピングモールも白目青顔顎外れな程に並んで居た。逆にこんな場所で良くここまで行列が出来るなあ、とレオリオは感心していた。立地の面積もそうだが、どう考えても歩道で収まる数ではないし、交通安全面のことなんて知らない顔をしてそうなのに、交通事故は起きてない不思議さ。ある意味一種の集団行動を想起させる代物だ。カメラがあれば撮っておきたい程度に、そのバランスは保たれていた。

二つ目の理由は、バスなんかで簡単に行けるとは思っていないから。クラピカもレオリオも、そこは同じ意見だったらしく、クラピカの提示した理由に補足を加えるようにレオリオも語る。

バスで仲良くハンター試験の会場に行けるならば、船長のように態々至る所へ試験官を置くとは思えない。また、そんな容易に行けるならば、ハンター試験が難関である、とは言われないだろう。そんなんで言われているならば全国の大学生はどんな受験をした合格しているのだろうか。ハンター試験の難関さ、その真髄はランダム性にあるとレオリオは確信していた。

毎年変わると言われている試験内容と会場、まずこれを見付けると言うだけで大半の人間は挫折するだろう。続いて本当の試験。これで一気に両手片手で数えられる人数まで減るのだ。一重に、試験が難しいから、では済まないレベルだろう。

仮に難しいからで落ちるならば、落ちた人間は救えない馬鹿なので落ちて心は痛まない。それに、ランダム性が無ければ、受験前で子供のように予習復習等をして対策をする筈だ。だが、それでは意味がない。

ハンターは死ぬか生きるか、受ける仕事、どんなハンターになるのかで様々なものになる。つまり、人の数だけハンターの種類、分野もある無限の可能性を秘めた職業である。どんなハンターになるかは人により、つまりランダムである。そんな不確定要素の多いハンター試験で、確定した問題、予測できる問題突き付けるだろうか？

レオリオは否、と答える。当たり前だ、不確定なものに確定したものを突き付けるなど愚の極み、門前払いだ。ハンター試験は単純ではない。だからこそ、不動の超難関試験と謳われ、その分、合格した人間に与えられる権利も大きいのだ。

ここまでを五分で語り終えたレオリオは、次の瞬間、これからの試験、先が思いやられる、と思ってしまうた。

「そう言えばオレ、船長から次に向かう場所、方法も兼ねて指示されたんだった」

「それを先に言えーっ!!!」

呆れて物も言えない中、彼らはこの島の奥、高台に見える大きな一本杉へと向かう最中、道を遮るように設置された建物（と言うよりはハリボテ）を見る。坂道に設置されたので、風が吹けば飛んでいきそうな程に不安定だが、そんな建物の真ん中、長机に手を掛け、神妙な顔をした老けた女性が一人。後ろには良く分からない人間が二人か三人か、数えても無駄そうなので省略するが、火の目を見るも明らかに試験官と分かる人間が居た。

老けた女性は、坂道を登ってきた三人を見ると、表情一つも変えずに、三人に聞こえるハッキリとした声で述べる。

「ドキドキーニ二択クイズウ〜！」

パフパフ♪

何とも言えない微妙な空気。年を重ねた女性の口から出るのはコミカルな言葉、どんなに盛り上げようと思っても鳴らしても空虚で虚しいラッパ音。ぱふぱふ鳴らしても無駄と言うことは理解した方が良さそうだ。

『虚し過ぎる…』

「(言ってやるな、可哀想だろ)」

思わず咲夜は言葉を溢すが、レオリオが諭す。哀れみを込めた視線をレオリオは向けていた。ゴンは何事かと思つてワクワクしているが、クラピカはレオリオと似たような感じで、冷静だった。今この場で逆に真面目なキャラを演じると浮くんだよ！察しろよ!! (無茶振り)

「クイズは一問！間違えたら即失格、ハンター試験は諦めて帰りな!! 因みに考える時間は5秒だよ」

「そして、回答は二択。それ以外の答えは誤回答とする！」

「んな無茶苦茶な！おいゴン、こんな奴等無視して行こうぜ」

思わずレオリオはそう言うが、目の前の老婆は試験官。答えずに進むのは不可能だ。必ず答えなければならぬだろう。ゴンは理解していた。レオリオも観念したのか、彼は嫌そうな顔をしながら問題へ耳を傾けるだろう。

しかし、問題は語られず、代わりに後ろから声が聞こえた。その声の主は飄々としていて、こそこそとレオリオ達を後ろから追っていたらしい。当然レオリオは気付いていた、正確に言えば咲夜が気付き、教えてくれたのだが……そう言った面で、彼はまだ未熟と言える。

先に答えてやるぜ、と意気込む男を、誰一人として止めなかった。理由は明白、どんな問題なのか、そしてその後、対策を練ることが可能になるからだ。5秒と言う短いシンキングタイムを伸ばしているようなものである。

「(くそ、さっさと聞いてさっさと去ね……)」

「問題！お前は一人しか助けられない。では、その内どちらを助ける？」

「1、自分の母親。2、自分の恋人」

トロツコ問題と言うやつだろうか。論理的思考実験だとかうろ覚えだが、そんな言葉を、この問題を聞いて思い出す。確か、トロツコに轢かれる人間を選べる問題で、時々世界で選んだ方の集計を取っていると聞いたことがある。何にせよ、これに答えなんてないと言うことを、博識なクラピカとレオリオは理解した。考えるだけ無駄である。しかし、ゴンには本当にそうか？と疑問を抱く。考える必要がないならば、何故問題として出すのか、疑問は違和感へと変わる。

その内に、男は1の母親を選び、理由を述べた後に奥へと進む。その後はその男のみぞ知る結末になるだろう。

「さあ、次はアンタ達だよ！受けるのか、受けないのか!？」  
「そんなの決まってる！受ける、だよ！」

ゴンが宣言し、クラピカとレオリオもそれに賛同する。

答えのない問題と言う面倒臭いもの。これが天下のハンター試験、何ともふざけている。だが、難関と言えば難関。引っかけ問題だろうと、間違えたらアウト。まるで溶岩の上で綱渡りしてる気分だ。そんなこと、一度もしたことないので想像で語っているが。

老婆が問題を出してきた。内容は先程、知らない男へ出した問題と然程変わらなかった。

自分の娘と息子が浚われた。助けられるのは一人のみ。

1、娘。2、息子。どちらを助けるか？

タイムリミットは5秒。それでもレオリオには永遠に感じられた。何故ならば、今回の声はメイド長と呼んでいる者（咲夜）で、時を止める力を持っているからだ。その力に慣れていると、何故だか普段でも時が止まった、または遅くなっているような錯覚が起こる。吐き気を催すようなゆったりとした時間、レオリオは孤独ながらに考えを決めていた。

そして、それと同時に、普通に時を歩んでいるクラピカとゴンもまた、アイコンタクトをしていたのか、頷き、このシンキングタイムである5秒をくれてやると言うが如く、誰も何も話さなかった。

3、2、1…。



「はい、終わりました」

緊迫した時間は過ぎ去り、間の抜けた老婆の声が発せられる。ぱふぱふと言うラツパ音はもう聞こえて来なかった。

「だーめだー！やっぱり全然分らないやー！」

「えっ、ゴン…お前、私とのアイコンタクトで分かったんじやあないのか？」

「あれ？それは『限界まで考えろー！』って意味じゃないの？」

結果的には良かったものの、どうやら擦れ違い勘違いがあったらしい。まず素人がアイコンタクトなんてするものじゃない。クラピカは困ったように笑いながら、違うぞと教えてあげた。 gon は驚いた様子だった。先程友人と言えるかは微妙だが、そんな関係になったばかりの人間同士がアイコンタクトなんて出来る訳もなく、当事者（主に gon）は不服そうにしていた。そんな彼らをレオリオは微笑ましそうに眺めていた。

『貴方も混ざらないの？』

「俺は部外者だ、あの輪に入る事は出来ない」

『そんなこと言っても、本当は入りたいでしょ？ 私は貴方を良く知っている…、だからこそ、分かる』

「良く言うぜ、分かっているなら、自由にして欲しいモンだ」

咲夜は紅魔館の食堂で小さくため息を吐く。依り代の健康状態は常に良くなってはならない。お嬢様—レミリア—の為である。これが咲夜だけの依り代であるならば、彼女はきつとレオリオを使い潰す。それこそ、死んででも動かそうとするだろう。けれど、この器は他の紅魔館の住人も使う。彼女だけの依り代ではないのだ。

同じ人間として分かり合える部分があるかもしれない。その前に、レオリオは道具であるから本来、分かり合える云々はどうでも良いのだが、精神面での健康と言うものもある。理不尽な悪魔のような主が鞭ならば、咲夜は飴になるだろう。バランスと言うのは何より大事だ。

「さっさとお行き！ 答えは無い！ それを出したならば、お前達は進めるのだ！」

急かされるように、案内された道を行く。少し進んだ後に、またばふぱふとラツパの音が聞こえたのは気のせいだと思いたい。

『去り際にあのラツパを鳴らすのは虚しいって教えてあげれば良いのに』

ふふつ、と愉快そうに笑いながら語られる言葉がレオリオの頭に響いた。それを無視し、歩き出す。

道中は特に何事もなかった。着々と一本杉へ近付いているのが分かる。けれど、それでも遠いのか、一時間、二時間、三時間と、歩き続けていた。

ゴンは山育ちに近い野生児のようなものなので、ハイキングと思っているのだろう。特に文句もなにも言っていない。クラピカも一応クルタ族であり、自然豊かな土地に住んで居たので問題はない。山道には慣れていた。

レオリオは言わずがな、この歳になるまで修行（拷問）に入り浸っていたので何て事はなかった。

歩いている内に時間は進んでいたもので、夜になるのも自然だ。空を見上げると星が散りばめられ、各々小さく輝き、暗い空に光を灯していた。流れ星は時期ではないのか、流れては来ない。尤も、流れてきても願いが叶うなんて子供の戯れ言で、寧ろ大人になった今は迷惑でしかない。なんといいっても流れ星は地球に近づく小惑星、宇宙からすれば塵カスですらない小さな（それでも一メートルくらいはある）岩石のようなもの。当然磁場だとか、天文学に精通してないので曖昧だが、とにかく電波障害等が起こる。それは非常に厄介で面倒臭い。夢を壊すようで悪いが、現実は無道である。物事には必ず良いことと悪いことがあるのだ。

フクロウの鳴き声が不気味に響く森で、一際目立つ大きな一本杉。辿り着けたのは子供の寝静まる時間、大人の時間であった。夕暮れなんて目でもない、上には既に月が登り、太陽なんてどうの昔に沈んでしまっていた。

「とうちゃーくー！」

ゴンは楽しそうにしており、辺りを見渡す。夜だからなのか、月の

光が一本杉の大きさのせいで届かない為、辺りは特に薄暗かった。

ふと一本杉の根本を見ると、人為的な小屋を発見する。精密に切られた丸太のログハウス、昼間だったならばさぞ風情があるのだろうが、夜は薄気味悪い雰囲気だった。とてもじゃないが、幻想的だなんて言えない。寧ろホラー、恐ろしい、怖い。そんな言葉が似合っていた。

ログハウスは建てられてから時間が経っているのか、所々に苔がついていて、しかし周りには余分な草木は生えてなく、まだ人が住んでいることが分かる。しかし、今は人の気配、それどころか動物の“ど”の字もない程に静まっていた。それでも遠くで鳴いているのかフクロウの鳴き声は森に響いている。唯一近くで感じられる生命体は小さな虫だけだろう。B級ホラー映画ならば舞台はバッチリ、誰が幽霊や化物役をやるのだろうか。

「おい、誰か居ないかー」

クラピカはそんなホラーな雰囲気負けじと、スタスタとログハウスの出入り口まで歩き、大きなノックを数回に及び、そして声をあげる。けれども誰も反応はしない。二回、三回。同じことをしても、聞こえてくるのはやはり遠くからのフクロウの鳴き声だけであった。

「……失礼する」

木製のドア特有の、耳に残る音を経てながら扉が開く。どうやら鍵は掛かってなかったようで、意図も容易く開かれた。しかし、開ける者が者ならば、きつと扉は重く、軋むような音を経ていただろう。過ぎた事はどうにもならない。

クラピカが始めに目にするのは、確実に故意的や部屋の荒らされ方。続いて木材独特の匂い。その中に混じる不思議な香り。いいや、香りなんかではない。生臭く、それでいて錆びた鉄のような、香水で掻き消せず、水で洗おうとも手に媚びれつくような、酷く残酷な臭い。そう、荒らされた部屋の中に、血を流して倒れる男が居たのだ。

「っ、おいゴン！レオリオ!!人が、男が倒れてるー!」

「なんだって!?!」

先に急いで駆け寄ろうとするクラピカ。しかし、それは一步目で断

念することになる。

例えるならどんなものが良いか。狐のような細く、それでいてギラついた鋭い瞳。耳は兎のように長く、でも兎よりも細くてしなやかそうに曲がっている。体は人間と同じように二足歩行をしており、体格はボクサー顔負けの屈強さ。足、太股にかけては特に太く、脚力が高いと予測可能な程に大きい。体毛は濃い黄色。黄色の絵の具を洗い、その絵の具が媚びれついた乾いたスポンジのような色をしていた。

そんな化物の手の先には女性が居て、首を持たれていた。絞められていると思わせ、実は女性の手が首と化物の手に挟まり、ワンクツシヨン置いているような形で、偶然首を締め上げられている状態にはなっていないかった。それでも痛そうに顔をしかめる女性。血に濡れた男性は手を伸ばし、女性を助けようとすも、重症なのか、暗くて良く見えないが、とてもじゃないが男性による女性の救出は不可能であった。

「おいどうしたクラピ、カ……………」

レオリオが駆け付けけると、レオリオもまたクラピカと同じ景色を見る。流石のレオリオも魔獣のような何かを見るのは始めてで、反応が遅れる。我に帰ると、きつとクラピカがレオリオに化物が襲い掛かって来ても何とかしてくれるだろう、と他力本願思考に入り、倒れている男性の様態を見る。

きるきるきるきる…。

鳴き声だろうか、特徴的な声が化物から発せられる。

次の瞬間、化物は家のガラス窓へ走り出し、ぱりん！と軽快な音と共に出ていく。クラピカとゴンは急いで追い掛け、その場にはレオリオのみが残る。

レオリオは冷静に男とこころへ近付き、暗い部屋なので手探りで、優しく診察を始める。出欠量的に、傷口は限られるだろう。

「妻は…、妻は大丈夫です、か…」

苦しそうに声をあげながら、しかし内容は他人を心配するもので、レオリオは感心してしまう。その後、気休め程度に適当な言葉を投げ掛けながら、傷口を探す。

しかし、レオリオは気付いてしまう。傷口が既に塞がっていて、血は乾き、この男があゝの化物とコンビであったことを。咄嗟に倒れている男へノックダウン狙いの顔面ストレートを打ち込もうとするが、既に遅し。

男はレオリオの首を掴み、強引に倒し、体勢を逆転させた。つまり、レオリオは倒れ、押さえ込まれ、男が首を掴んでいる状態だ。

男は段々とあの化物そっくりに姿が変わっていく。間近で変身される、これもグロくて気持ち悪いのが良くわかった。鼻が伸び、目先で男だった化物の呼吸が聞こえるし、感じる。

『おや、未々ねえ…。ふふつ、殺されない程度に頑張りなさいな』

「てめっ、くそ…いやかましい！お前もお前で離しやがれ、ってんだ！！」

余裕をかましていた化物に、空いていた右手で今度こそ顔面ストレートを打ち込むレオリオ。体勢が体勢なので、威力は然程無いが、それでもレオリオの首から手を離し、痛い痛いと言絶する程度にはダメージが入ったらしい。

「あのメイド長も、魔女も門番も…他人事過ぎるだろ…！」

忌々しそうに語るも、目の前の化物は何を言ってるのか分からなそうに首を傾げている。それは置いておき、レオリオは腰から隠していたバタフライナイフを取り出し、戦闘体勢に移る。

それを見た化物もまた、レオリオを敵と認知したのか、余裕は消え、細く、それでいて捕食者の目をしたそれで睨み付ける。

「てめえは、殺しても問題ねエよな」

「きるきるきる…クケケ、やれるもんならやってみろってんだ！」

レオリオはその言葉を合図に、ナイフを投擲。いや、投げて使うのか!?!と化物は思いもしなかったのか、避ける動作が雑になり、大きく体を逸らすことになってしまった。避けた先へすかさず伸ばされるレオリオの左足。鋭い一撃は見事化物の左横腹へクリーンヒット。そのまま、未々沢山隠し持っているナイフを左手で数本取り出し、素早く投擲。

今度は当たるまいと天井へ張り付くようにして俊敏に回避される。

化物はその後、天井から足を唸らせ、レオリオへ上から飛び掛かる。単調な軌道故の速度。鋭い爪は咄嗟に出したレオリオの右腕を挟むようにしてダメージを与える。血が出るが、それでもレオリオはお構い無く、接近してきた化物の、その爪を出した腕を掴み、掛け声と共に両手で地面へ叩き付ける。

家具と共に大きな音を経てながら家の床と激突する化物は、ぐええ、と苦しそうにしながら目を回す。気絶だ。

「…つたく、折角のスーツが台無しじゃねえかよ」

気絶した化物にトドメを刺すため、ナイフを無傷の左手に構え、近寄る。すると突然窓からレオリオに飛び掛かる存在が現れた。

「駄目だアーーーっ!!!」

その存在はゴンだった。勢い良く抱き付く形でトドメを刺そうとするレオリオを止めるゴン。しかし、その後の事を考えて無かったのか、そのまま二人とも倒れ込む。いてて、と言いながらゴンは立ち上がり、化物の前に立って、レオリオへ再度

「レオリオ、殺しちや駄目だよー!」

と、語る。倒れた体を起き上がらせたレオリオは、若干ゴンを睨むように見てしまいながら、何故?と理由を聞く。ゴンは答える。

この魔獣は良い人で、試験会場への案内人である。

要約するとこんな感じだ。何故かゴンの説明は長く、遠回しに言ったり、同じことを何度も繰り返すので、焦っているのが良く分かる。レオリオは相槌を打ちながら、気絶した化物を見る。どう考えても案内“人”には見えない。しかし、ゴンは嘘を吐くような人間とは思えない。

こんなとき、クラピカが居ればなあ、と思っていたレオリオは、ご都合主義の神様でも居るのか、都合良くクラピカが一本杉のログハウスに到着し、家の惨状を見ることになる。

後ろには二匹の化物、どちらも本当に似ていて、鬼畜難易度間違い探してもやってるような気分させられる。

「…何だこの状況は…、取り敢えずレオリオ、君の手当てを、」  
「必要ない」 …!?!」

クラピカの言葉を遮るようにレオリオは淡々と語る。二匹の化物は取り敢えず、奥へ飛ばされ、気絶した一匹の化物を起こす。

「何を言ってるんだレオリオ、君の腕は今すぐ手当てしなければならぬ程に重傷だぞ」

「手当てもなに必要ない。これくらいなら慣れてるからな。きつと、すぐ治る」

右腕、レオリオの親友の腹を貫いた腕。沢山の命を奪ってきた腕。言えばキリがない程に穢れてしまった彼の右腕。声が聞こえてくる。その度に何かを殺した記憶。数年間、彼は何をして生きていたのだろうか。

それを語るには、あまりにも内容が濃く、それでいて言葉にするのもおぞましい。彼が自分の空白の過去を語るその時は来るのだろうか。

化物、魔獣、それらはキリコと名乗った。キリコ夫婦十 息子はここでハンター試験の会場へ案内してくれる存在らしく、レオリオは改めて殺さなくて良かったと思った。殺すことに抵抗を感じないと言うのはどうかと思うが、それはゴン達の和やかな会話も雰囲気といった間にかどうでも良くなっていた。

キリコ達に、各々一人ずつ、キリコの足に掴まり、空を飛ぶ。正確に言えばキリコが飛び、ゴン達が掴まって浮いている状態だ。

空の上から眺める町の夜景は何とも言えない美しさがあった。自然の星空も良いが、地上の人工的な星空もまた良いものだ。人の手で作られているからか、その灯しは歴史の深さと人間の知識、そしてどこか温かみを感じるものだった。

『綺麗ね、こっちは大違い…』

ふと、咲夜が呟く。街頭の光なんて何年ぶりに見ただろうか。最後に見たのは、そう、レミリア達と共に幻想郷へ来る前だ。幻想郷に街頭はない。全て火で灯りを取っており、そこにガスも電気もない。

ロウソクでさえ、近代的と言われるのだ。文明の停滞が良く分かる。久々に触れる近代の文明に愛しさと恋しさを募らせている咲夜。しかし、彼女はそこへ戻りたいとは思わない。

全ては我らが主、レミリア・スカーレットが決めること。そこに従者の意思は無くても良い。一生死ぬ人間なのだから、一時はそばに居たい。歪んでいようが無かろうが、それが咲夜の忠誠心なのだ。

「ハンター試験、合格しような」

誰と、とは言わない。誰が、とも言わない。

人知れず呟かれた誰かの言葉は、夜の町に溶けて消えていった。



んにやび…、実は（小並感）って淫夢語録なんだゾ…  
（力なき声）

キリコ達は目的地へゴン達を送ると、彼らは今後の武運を祈る。甲斐甲斐しく送ってくれたキリコ達へ、ゴンは感謝を述べると、地下行きへのエレベーターへ乗る。

どのくらい降りてるのだろうか、彼らは意外と長い搭乗時間で、緊張、不安、そして何よりも期待を膨らませる。止まったかと思つたエレベーターは、機械的なベルの音をエレベーター外内部含めた、きつと会場の人間にも聞こえるように鳴らしながら扉を開く。三人は生唾を飲み込みながら、エレベーターから降りる。

エレベーターの外に居たのは、やはり自分の力に自信があるような屈強な男が多かつた。しかし、ちらほらと見える女性や、老人、そしてゴン達等、ハンター試験を受けようとしてるのは、そう言つた男供だけでは無いと伺える。

彼らの胸にはナンバープレートがあり、全員貰えるのだろう。そうレオリオは考えていると、スツ、とレオリオ達へ出される小さな手が視界に入る。

「ナンバープレートです、どうぞ」

空豆みたいな、しかし空豆よりも青々しく、空豆よりも大きな豆を頭に被つてるような小さな人間（？）が、レオリオ達へナンバープレートを差し出す。

ナンバープレートには三桁の番号が書かれており、プラスチック製、拳一つ分する意外と大きいプレートだ。それを器用に三枚まとめ渡してくるので、この豆みたいな人間（？）は相当馴れているのだろう。番号は各々400から始まっているようで、少なくともこの場に400人は居ると分かる。

何となく一番乗りが良かったなあ、と良く分からない呟きをするゴンは“405”番プレート。子供だからか、胸辺りにつけてもプレー

トが大きく、不格好な見た目となっている。クラピカは“404”番プレート、レオリオは“403”番プレートだ。

プレートを貰い、改めてレオリオは辺りを見渡す。どれも筋骨隆々の、猛者みたいな見た目をした男が視界を埋める。武器も大きなサーベルから銃まで様々で、所々話し合っている人間も居た。コミュニティの拡大だろうか、それとも宣戦布告か。

『所詮は似た者同士の馴れ合い、ほら、争いは似た者同士でしか起こらないって言うでしょ?』

意外と辛辣な咲夜の声。唯一、この場でその声が聞こえるレオリオはクスツ、と小さく笑い、その通りだと便乗する。しかし、それを言うところの場の全員が“似た者同士”になるが、メイド長は気付いていないらしい。ある種の挑発と言うべきか、けれど、それを聞けることが出来るのは、先程述べた通りレオリオしか居ない。

ゴンとクラピカ、レオリオは良くある学生の教室で仲良しなグループのみで固まる女子のように、三人で適当な雑談をしていた。ただ、やれ武器だの、試験内容はどんなのだの、こう言った内容だったので、雑談と言うよりも予測や考察、この場においての一先ずな感想発表会だ。

そんな発表会を披露していると、少し離れたところから男が近付いて来ることに気付いたレオリオ。警戒心を剥き出しにして、唸る犬のように不機嫌ですよ、と訴えてる風にしていければ

「す、すまんすまん。驚かせてしまったかな?」

男は引き気味に謝罪する。それでやっと気付いたゴンとクラピカは、男の方へ視点を置く。青色を基調とした分厚い布、それを和服のような着方をし、下にはジーンズ調のズボンだろうか。けれども全体的に小太りである為、ズボンはパツパツだった。

顔には髭が無尽蔵に生えており、整えてないのが分かる。雑つぽさを体で体现したような男は、芝居掛かったように片手をあげ、挨拶をする。

「やあ、君たち新入りだね?俺はトンパだ、よろしく頼むぜ!」

「オレはゴン!よろしくね、トンパさん」

御近づきの印にと渡されたオレンジの缶ジュース。何の変哲も無さそうだが、レオリオの視点から見ていた咲夜は分かるし、感じれる。彼女は言わば「なろう系」と呼ばれるものの類いに入るのではないだろうか。

原作と言う名の世界を理解し、構造も未来も分かり、人物全てが手の平の上である。咲夜だけではない、レミリアもパチュリーも、皆が皆、分かる。

輪廻転生では無いにしろ、その知識と視点はとてつもないアドバンテージとなるだろう。

『不要、貴方が飲みなさい』

「えっ?」

目の前の男、トンパは若干驚き、また、少しだけ冷や汗をかく。もしかして気付いているのか?等と言った不安や緊張が故に汗が頬を伝う。トンパはレオリオを凝視する。また、隣に居たゴンもレオリオを見て、首を傾げている。そのまま缶の蓋を開けると、鼻孔を擦る不愉快的臭いがゴンには分かるのか、眉を寄せ

「トンパさん、これ腐ってない?」

彼はトンパに缶を突き出しながら言う。単純で裏表が無い性格だからこそ、意外とデリカシーが無い事が言えるのだろう。

これが例えば、本当に普通の親切心で缶ジュースをあげてるとしたら、真面目にデリカシーが無い。いや、腐ってるジュースを与えるトンパもトンパであるが、それでも苦笑いで済ませるのが大人の暗黙の常識だろう。

けれど、これは作為的なものなので結果的にはゴンは飲まなくて正解である。トンパは奪い取るようにしてゴンの手から缶ジュースを貰い、載ってもない賞味期限を見ては謝罪しながらジュースを捨てる。

その姿は知る者からすればとても滑稽で愉快であり、辺りの人間はニヤニヤと笑みを浮かべたり、小さな笑い声を上げていたりした。

新人潰し。良くあることだ。

特に競争社会において、優秀な人間程、新人は信じ易く、染まりや

すい。下衆く、汚い色へと染まれば、いつかはやられたように、その者も未来の新人へとやっってしまう。悪循環と言うのだろう、それが新人潰しだ。

どこかの世界ではランキングが追い越されそうと知人に言われただけで河川にて新人を潰そうとしたがワンパンで返り討ちにあつた可哀想な者が居るらしい。哀れである。

『腐ってるものを渡そうとしたの?』

『今この場で殺しても構わないのよ? たかが人間、いいや、豚に時間は要らない。その時間、断ち切っちゃえば来世は期待出来るんじゃない?』

「レオリオ、流石に言い過ぎだ!」

「す、すまんって…また今度普通に賞味期限切れてないジュース奢るからさ」

『……ハンター試験中、後ろには気を付けることね』

きらり、と袖口からナイフの刃をトンパだけに見えるようにして脅し、トンパはそれに気付けばか細い悲鳴をあげて小走りに消えていった。ふん、と不機嫌ですよアピールをしていると、クラピカがどうしたのか、とため息を溢す。

難儀な性格、いや、レオリオは時々変な事を起こすからな、と頭で考えるがどれも「レオリオは変な人だから」と言う自己完結で終わってしまう。仲間、友人にそんな思考持ちたくないのだが、どうしてかそう思ってしまう。クラピカはそんな自分に嫌悪感を抱く。

逆にゴンはまた纏う雰囲気が変わったと思っていた。

先日の船室に居た、初めての出会い。レオリオは気付いてないだろうが、ゴンは気付いていた。独り言をしていたことに。いや、誰にでも独り言の一つや二つ、あるだろう、そこは別に可笑しくはない。

だが、捨てた本を拾い、燃やしては独り言で嫌味のようなもの言うのは中々の奇行である。

船長の部屋でもそうだった。元気なレオリオ、陰気なレオリオ、何だか常識人そうで違う、明るいレオリオ。

陰気から突如として正反対な明るい様になるのは、違和感を感じ

た。それも、価値観もバラバラで、言ってることとやっていると凸凹している。正しく“変人”の文字が似合う。

変人と言うよりも、何処か責任感らしきものの欠如だろうか。何の責任感かはまだ分からないけれど。

悶々と考えている二人を他所に、レオリオは粘っこく、面倒臭そうな視線を送ってくる人間に気付いていた。

敢えて無視していた。だって、面倒臭そうなんだ、嫌に決まってる。ちらりとバレないように見返してみても、気付いたのか笑みを深める。

『へ、変態……』

「ん？どうしたの？」

何で私を見て舌舐りするの？とある種の悪寒を感じながら、その様子に気付いたゴンは心配そうに顔を覗きながらレオリオを見る。今は“咲夜”ことメイド長であるが、ゴンはそれを知らない。故に、どんな喋り方だろうと、雰囲気だろうと、ゴンの中で共通してるのは全て“レオリオ”であることだ。

そんなレオリオが青ざめて何故かゴンの後ろに回るので、何かあったのかな？と辺りを見渡す。

しかし、ゴンは気付かない。器用にも殺気と（咲夜にも）理解出来ない感情をレオリオにだけ向けていたので、その無駄や器用さを職人等の事で使えば良いのに、と切実ながらに思う。

その笑みは、清々しいまでに欲に従順であることを示していた。

『ひえっ……』

逃げ出す咲夜。流石に変人変態の相手はやったことないらしい。意識を取り戻すレオリオ、きよとんとしていた。

そして彼も、その殺気と（レオリオにも）分からない感情を向ける人間の方を振り向く。

そこにはピエロメイクに派手な紫基調であるが、若干赤が混じった髪色をワックスか何かで逆立てており、奇抜な服装の男。目は細められ、その黄色の瞳がレオリオを射抜く。

「…やっつと、見てくれたね★」

語尾に音符（正確に言えば記号）が付き添うな呟き声。それを聞き取るには距離があつたのか、レオリオに聞こえない。レオリオが聞こえなければ二人とも聞こえない、と思ひ気味であるが、一応山生まれ山育ちのゴンには少しだけ聞こえた。

クラピカはまだ自問自答に追われている。

ジリリリリ！

耳に残りそうなサイレント、いや、呼鈴の音がスピーカーから流れてくる。それだけでここに集まつた人間はこれから何が始まるのか分かる。一気に静まつた人間達は、こちらへ寄ってくる一人の新たな人間に皆、注視していた。

「お、お嬢様…！」

「あら、どうしたの？」

「変態が…変態があ…!!」

「真面目にどうしたの!？」

びすびす、と泣きそうな目の前の従者。困つたように笑いながら、その従者、咲夜に何があつたのか聞く。

曰く、変態に目を付けられたのだと言う。レミアアは考える。

いや、精神に私が居ても、外見は老け顔の二十歳の青年。整っているとは言えない、所謂普通の顔。

言つては悪いが、男性嗜好諸君の人間に狙われるような人間とは思えない。そんなに尻を追い掛ける人間が居るとは思わない。だって幻想郷は女性所帯多いから。

「何かの間違いとかじゃ…ないの？」

幻想郷に女性所帯が多いからなのか、男性耐性が無いと判断したレミアア。子供（ゴンとかクラピカ）ならまだしも、ハンター試験には男が多いと聞く。まあ、可能性の話ですれば、そう言う男性嗜好の人

間が居ても可笑しくはない……かもしれない。

しかし、レミリアも咲夜も勘違いしていた。特に咲夜は言葉足らずである。

別に、ヒソカは変態ではない。確かに変態の部類に入るが、分別はある、そう、“戦闘狂”の変態である。

「取り敢えず、ここから先は私に変わりなさい。咲夜は館の仕事でもしてて良いわ」

「はい…その代わり、小悪魔を側に置いておきます」

「……まさか、選んだ人間が男性嗜好主義(?)の人間を集めるとは……深刻な顔をして、深刻な声色をしてるが要約すると“貞操が危うい”である。それも、勘違いなので全くそんなことはない。強いて言うなら戦闘が始まる危機はある。

そんな事は知らないレミリア達であった。

奥から出てきたスーツの男。特徴的な髭を持つダンディーな男性は人の集まりを掻い潜り、未だ先の見えないトンネルのような道の先に立ち、直立。彼はこの会場の全ての人間の視線を独り占めする、対して彼は見える限りの人間を一瞥すると、良く通る声で挨拶をした。

「私の名はサトツ。このハンター試験、第一次の試験管を務めさせて頂きます。」

落ち付いた声色、けれどもその一言で会場は緊迫とした雰囲気支配される。様々な人間は生唾を飲み込み、見入るようにサトツを見ていた。

『サトツとサトルって似てて、間違えちゃいそうね』

ただし、一名。人数は変わらないが、意識は増える。レミリアは空気の読めない発言をレオリオの頭の中だけで語る。その言葉に苦笑いで答えると、相変わらずだ、と暫し呆れを。そうすると、必然的にレオリオだけこの会場で異質な“呆れ”と言う感情が表れていた。

サトツから語られたのらハンター試験について。ウン万人に一人か二人程度しか合格しない程に難しく、厳しく、命を落とす可能性があること。運も人間関係も実力であり、常に死と隣り合わせの限界であること。

「さあ、二次試験まで私に着いて来て下さい。試験は既に始まっています」

そう言うと、サトツはくるりと後ろを向き、大股で歩き始める。そんなことで良いのか、楽勝だぜ、等とレオリオ達の後ろから声が聞こえてくる。下品な笑い声も聞こえてするが、関係のないことだ。

最後の受験者なのだろう、レオリオ達の後ろには誰も居ないし、誰も来なかった。つまり、今期のハンター試験受験者は四百人前後と言うことだ。その内、両手で数えられる程度しか合格しないと言うのだから、大変と言う言葉され生温いものになりそうだ。

レオリオ達は最後尾、他の受験者達はゆっくりだが、渋滞していた車のように少しずつ動き始めた。試験内容が伝えられた頃、既に走り始めている持久走。とてもじゃないが、精神的に辛いものになるだろう。

人間とは、目標やゴール無くして走ることは難しい生物なのだから。

レオリオは息切れをしない、スーツすら脱いでない。汗もかいていなかった。何故か？当たり前だ、これよりも更に過酷な修行(拷問)を既に体験してるから。内に潜む悪魔みたいな六人によってだ。

『何だこれは…何故馬鹿みたいに皆走っている？』

「そう言う試験なんだよ…黙って見てろよ」

レオリオはレミリアにそう伝えれば、くくつ、と喉を鳴らすような笑い声が聞こえてくる。大方、レミリアが態度の大きいレオリオに笑ってるのだろう。いつものことだ。曰く、退屈しない、とのこと。良く分からない等とレオリオは常に思う。

ふと、レミリアが教えてくれる。後ろでめちやくちゃ面倒臭そうな殺気と(レミリアにも分からない)謎の感情を向けてくる存在に。とつくに気付いていたと、敢えて無視していたと、言い訳を頭でくる



くる回す。

「ゴン、クラピカ。俺ア少し前を見てくる。ちゃんと走つとけよ?」

「当たり前だよ!レミリアも気を付けてね?」

「了解した、転んで怪我しても知らないぞ」

心配してるのかしてないのか、クラピカの言葉には小さな刺がある。ゴンはマジ天使と言われても良いかもしれない優しさがあった。

「お嬢様とは大違いだぜ」

『あら、私だって優しいわよ?慈悲と優しさから痛みを与えずに殺してあげるもの』

「優しきイコール無慈悲って言われても何も言えない奴だな」

苦笑いで呟きながら、ゴン達と離れる。

残されたゴン達は、お嬢様とは誰なのか、誰と話してるのか、それについて見当も付かなかった。後ろから急スピードで追い上げてくる存在を見送りながら、また後からゴンへ接触してくるもう一人の少年との運命を絡ませていた。

レオリオはゴン達と離れると、ちらりと後ろを見る。やっぱり付いてきていた、ピエロの男。何者かは知らないが、絡み付く視線は女からだけにして欲しいと眉を寄せながら思う。レミリアがここに居たならば頭を小突かれていただろうが、生憎と彼女はあくまでも思念であり、精神体である。

「やあ◇初めまして…君、面白いねえ♡」

「うわっ…」

『コイツか、《蜥イ螟》が言ってた変態…』

レミリアが幻想郷の人名を言うのと、やはりノイズが走ったように聞き取れない。文字で書いて貰っても、まず言語が違うし、合わせて貰っても何故か文字化けしたように可笑しくなる。レオリオの意識は無いから、仕方ないだろう。回りくどく教えても良いが、そこまでして教えても意味はないと思い、レミリア達は諦めた。

ピエロ男はレオリオを上から下まで舐めるように見ながらニコリと笑みを浮かべる。鳥肌が立つレオリオ。

お互いに走るも、どちらも限界が来ることはないだろう。今すぐゴ

ン達の元へ帰りたいが、我慢し、レオリオはピエロ男と並走する。

「お前、何の用だ。態々一人に絞って殺気向けて来やがつてよオ…」

「なあに、そんな大層な物じゃないよ。単純、美味しそうだなアつて…」

♣

『気持ち悪…!』

レミアアの直球な言葉に、思わず「んんっ…」とネットスラングで言えば「草」や「w」が使われそうな静かな笑い声を出してしまうレオリオ。仕方ない、笑ってしまうのは仕方ないことだと自分で自分を納得させながら、ピエロ男を見る。

不思議そうに見詰めてくる彼は、興味深そうに、もつと近くで見ようと近付いてきていた。その度に離れようとしても、いつの間にか壁際であり、逃げ場等無くなっていた。

「僕はヒソカ…ねえ、君、何て言うの?」

ずいっと顔を近付けて来ながら聞いて来る。止める、来るな、近寄るな。そうやって言っても無駄らしく、ヒソカはレオリオにぴつたりと、しかし走る事については支障が出ない絶妙な距離で聞いてくる。

いつの間にかレミアアの声は聞こえてこなかった。ひい、と小さな悲鳴をあげながらスピードを上げて、ヒソカはそれに着いてくる。何で、何で来るんですか。青い顔でそう思いながら、諦めたようにレオリオは自らの名前を名乗る。

「レオリオ、ふふっ…良い名だねエ♡」

「僕は君を気に入ったんだよ。どう?この後…殺らない?」

「嫌だ、止める、帰れ。試験に落ちろ」

文章だから「やる」も「殺る」と分かるが、言葉では分からないものもある。所謂同音異義語とやらである。髪と紙が、同じ発音であるのに、意味は違う通り、意味は違っても言葉は同じ。レオリオは完全に勘違いし、身体目当てかよ、ええ…?と困惑してしまう。

自慢でも自傷でもないが、レオリオは女性受けしない顔であることは分かっていた。普通、中の中、もしかしたら中の中の下かもしれない。それくらい自分の顔や体を分かっているつもりだ。

だが、世の中にはロリータコンプレックスなんて言葉がある程だ。

時々、そういう特殊嗜好の人間も居るのだ。ヒソカはその類いなのか、とレオリオは勘違いからの自己完結を決めてしまった。

「俺はそういう趣味も何もない。平和に医者を目指したいんだ」

「平和に、って言うならまずハンター試験とか受けないと思うけどね  
◇」

「ハンター試験、あつた方が金、入る……って、お前には関係無エよ!!  
さっさと落ちてくれたばれ!!」

辛辣過ぎるだろうが、変態の類いにはこれくらい言わないとストーリーカーしてくる輩が居るので、慈悲はない。片言になり気味だったが、少しだけ目的を言いながら、後で何故教えてしまったのか後悔が襲ってくる。

ヒソカと言う男の目的が分からない。本当にただの嗜好によるものなのか、または別のものがあるのか、レオリオには分からなかった。

ぎゃーてーぎゃーてー(レオリオだけが)騒ぎ、結局話は有耶無耶となり、レオリオは後ろへ下がっていった。ヒソカは取り敢えず見逃してくれるらしく、スピードを落としたレオリオを追ってくることは無かった。

「あつ、レオリオ」

ゴン達とレオリオは合流すると、見知らぬ少年が追加されていた。まさかあのハンター試験に一人ならぬ二人まで少年が居ると思わなかった。二十歳になるレオリオも青年と言えばまだ青年だ。正確に言えば十九歳だが。

「誰だこのオッサン」

「オッサンじゃねえよ」

呆れながらに言われた言葉に反応する。少年は首を傾げていた。

姿を見てみると、本当に子供だった。銀髪のウルフカットのような髪型に少し大きめの白Tシャツにインナーで紺色のハイネック。シンプルな単色カラーで、ズボンも少年らしい膝までの短い短パン。こちらも単色だ。左脇に大きなスケートボードらしい板を持っており、ゴンとは似てないなあ、と小学生並の感想を持つ。大きな目だけはゴンと似ているが、けれどつり目気味である。

胸元には「99」番のナンバープレートがくっついており、レオリオ達よりもかなり早くこの会場に来ていたことが分かる。先程聞いた声色も子供のそれで、きつと、シヨタジジイと呼ばれる、所謂子供のようなおじいさんではないと分かる。いや、シヨタジジイも子供の声色だからまだ少ない会話では分からないが、見聞ではそんな感じだった。

「ハンター試験ってのは顔面偏差値も高いのな」

「オツサン、そんなこと言ってるよと落ちるよ」

「だからオツサンじゃねえよ、俺はまだ十九歳だ！」

「「えっ」」

レオリオの年齢公開に、ゴン、クラピカ、少年は信じられないと言うように驚愕の声が出たらしく、それがピタリとハマった。逆に「えっ」と言いたいのはレオリオらしく、眉間にシワが寄っていた。

「俺ってそんなに老け顔か…？流石に悲しくなってくるんだが…：！?」

『それでも変態は釣れるからまあまあなんじゃないかしら？』

『うるせエ！その変態にビビって消えてたのはどこのお嬢様だッ！』

『消えてなんか無いわよ！少しお花詰みに言っただけだよ!!』

『嘘つけ！今までンな事一度もねえだろ!!』

『何ようるさいわね!!私に楯突く気!?!』

「楯突いてねえだろ、事実を述べたまでだ！」

「なんだこのオツサン!?!」

「頭おかしいんじゃないの…？突然一人で大声出して…」

残念ながらレオリオとレミアアの、端からみればレオリオが叫んでいるようにしか見えないこの会話。特に、レミアアの声はレオリオの脳内で響いているようなもので、独り言でしかなく、これを伝える手段は殆ど無い。頭おかしいと言われ、啖呵を切り始めたレオリオ。これが美鈴等だったら怒りよりも呆れが来るだろうが、レミアア相手なのでそりやもう勢いで怒る。怒ると言うよりも噛み付いている。まるで犬のようだ。

「オツサン呼びするな！俺にはレオリオって名前があんだよクソガ

キ」

「そつちこそ、クソガキって呼ぶなよ。キルアって呼べよ」

「知らねエよ、初対面で名前知ってたらストーカーか変態だろ」

「いいや、殺し屋とかなら事前に調べて来るから、ストーカーと変態と殺し屋だね」

「候補を増やすな！」

なんだコイツ。互いの第一印象はそんな感じである。

レオリオはやっぱりクソガキで、キルアは頭おかしいオッサン（十九歳）で。

殺し屋とか厨二病か？と疑いたくなるが、レミアは知っている。この目の前の子供は殺し屋一家の一人であり、この物語のキーマン。主要人物の一人であることを。漫画でしか知らないなので、やはり動いているところを見ると、本当に別世界を覗いているんだなあと思う。漫画の世界。白黒だろうか？と思っていたが、なにもカラーページと言うものもあるし、聞けば「アニメーション」と言うものもあるらしい。紫の外の世界についての知識には敵わない。外の世界から来たが、結局は逃げて来た英国からの吸血鬼なのだから。

創作物、人の考え、人の生き様、選択肢。様々な要因の数だけ世界は存在するし、運命は絡み合う。運命を見る悪魔みたいな吸血鬼、レミアだからこそ分かる感覚だ。

『楽しそうね、この遊び。私にもやらせてよ』

けたけたと笑いながらレオリオに提案するも、それを無視するレオリオ。どうせ勝手に意識を奪ってくる癖に、たまに律儀に聞いてくるお嬢様。良く分からない奴だ、と何年も一緒に（と言うよりも勝手に意識に居座って）居るが、まだ不明なところも多い。

壁はあるし、意味深なプライベートの時は覗いてこない感覚はある。声が聞こえてくる前に、レオリオだけに感じる何かがあるのだ。

例えるなら電気。千切れた配線を繋げ、電気が通るような確かな感覚。レミア達にも言っていない一つ目の秘密だ。繋がってる間は通電するように分かるし、離れている、つまり覗かれてない時は電気の供給がストップしたような感覚で分かる。だからこそ、ヒソカの時

に見るのを止めて逃げたのが分かるのだった。

“出口が見えてきた!!”

先頭の人間の声が聞こえてくる。このうざく、謎に濃厚な出会いをさせてくれた持久走もそろそろ終わるらしく、人混みの隙間から先を見ると、確かに光が見えていた。後ろからでは試験管のサトツの顔は見えないが、きつと走り始めて幾分かしたが、何も顔色一つ変えてないだろう。

各々ゴール、希望が見えてきて力強く足を動かす様が見れる。ゴン達四人は未々余裕そうに足を動かす。レオリオに至っては最初と同じく、息すら切れてない。それは四人同じであるが…。

「ゴン、競争しようぜ」

「良いよ！あつ、じゃあ負けの方が何か奢るつてので…どう？」

「良いね、乗った！」

「…とても元気そうだな」

子供らしく、無邪気な提案を二人は承諾し、セーので走り出した。それを眺めるクラピカとレオリオ。二人は苦笑いしていて、クラピカに至っては楽しそうと感想を溢す。

「…そうだなあ…一応、これ試験なんだぜ？」

「わかってるさ、君じゃああるまいし」

「いちいち癪な言い直しだぜ」

冷静なクラピカはきつと、皮肉を込めているのだろう。クスクスと笑いながらスピードアップしていく。レオリオもそれについていくようにスピードアップしていく。

所謂子供組と大人組とやらだろう。四人全員、まだ十代であるけれど、それでも、こんな短時間で友人と呼び会える程度には仲良くなれたのではないだろうか。

少なくとも、この第一次試験中は、そうあつて欲しいと願う誰かが居た。

ああ逃れられない！これがカルマ（確信）

この濃厚な出合いをさせてくれた嫌味なトンネルから始まった持久走、その出口。そこからは外の光が見えており、レオリオとクラピカが出口へ到着する頃には、ゴンとキルアは楽しそうな様子で話していた。

レオリオとクラピカはそれなりに後ろで走っていたのか、辺りを見渡せばちらほらと人集りがある。それでも、この持久走だけで多くの人間が脱落したのは目に見えている。また、これだけでその他の人間もまた、息を切らしたりしているのである。

ハンター試験と言うものだから、筆記に加えてとても過酷なものだろうと思っただが、内容だけ見れば子供騙しのようなのである。内容だけ見ればの話だが……。実際やってみれば分かるだろう。例えば子供のやる持久走だったとしても、このハンター試験の持久走は別物であると言うことを。

対してレミアはただ走るだけの事を見続けられる程暇人でも無ければ飽きない訳でもないので、終わるまで咲夜と変わり、近くに呼ばれた小悪魔とぎこちない談笑を始めていた。

内容は様々で、例えば友人のパチュリーのこと、館の設備や付属図書館の本のこと。たまに悪魔らしく、魔法に触れる事もあるらしく、流石は魔法使いの呼んだ悪魔だ、と少しレミアアを感じさせる事もあった。だが、基本的には緊張しているのか、粗相の内容に吃りながら話すのが小悪魔であった。

これならまだ静かにお茶を飲みながら、度々嫌味を言う友人のパチュリーと過ごすのが有意義であると判断するのは遅かれ早かれ、きつとレミアアはそう思うだろう。ただし、今は既に運命を一つねじ曲げた瞬間を見る為に、席を外す訳にはいかないレミアア。

レミアアにはある課題と言うか、その類いのものがある。この話を持ってきた張本人、八雲 紫に定期的な報告をすることだ。それが面倒と言ったらそうなのだ。何せ、あの神出鬼没の妖怪賢者を呼ぶのに

まず一手間、続いて報告するのに二手間、最後に煽り合いで三手間だ。「報告」「連絡」「相談」、略して「報・連・相（ほうれんそう）」と言う社会の常識と言えば常識なそれは、この「常識に囚われてはいけないのですね」でお馴染み幻想郷にも適応されるのかと、レミリアは密かに嫌味を込めて紫へ言ったことがある。

すると、帰ってきた言葉は

「常識とは個人の主観からの成り立ちですわ」

である。前提から引っくり返るその言葉に毒牙を抜かれたレミリアはやる気が失せたように報告を終わらせたのを今でも覚えている。と言うよりも、まだ記憶に新しいのだった。たぶん三日くらい前だ、とても最近である。

「常識」と「普通」の違いとはなんだろうか。

答えは簡単、集団による思想と個人の思いから成り立つ一種の洗脳、集団圧力である。

普通に考えれば

普通はこうあるべきでは

普通に生きよう

では、普通とは何だろうか？一般常識的に考えたものなのか。しかし、その一般常識だろうと、個人で線引きが違うのも然り、曖昧である。また、普通と常識は似て非なるものだ。同一視は出来ない。

紫によれば、普通とは、その土地その国、その世界で定められた理から外れることの無い平凡な行為。または人間や野生生物等に刻まれた本質的な規則、つまるところは自然界のルールの下に作られた文明独自の行動の範囲であること。

難しく考えることはないと言は紫は言う。しかし、レミリアは困惑する。

まずなんで私がこんなことを考えないといけないのか、ああ、そうだ。確かクソ暇だからだ、悪いのは暇にする奴らか。等と責任転嫁と思考放棄が目立ち始める。

では、その文明独自の行動の範囲とはなんだろうか。顕著に出てるのは人間の社会である。縦社会であるにも関わらず、人間の中でも



日本人”とカテゴリーされた部分は、その土地に住まう人間は皆平等であると言う矛盾を抱えている。

働けば働く程楽も出来る。人間の通貨が手に入る。そして下に人間を付けて働かせれる。それでは、それは平等とは言えるのか。

平等とは皆が等しい立場、環境、その他同じ部分が多い事を指す。しかし、この矛盾は平等であるが平等ではない、なんて小泉構文もアイスを落として逃げる程度に矛盾が矛盾を呼んでいる。

何が言いたいのか、結論としては “普通とは社会の多数が認識する文明独自の行動範囲で特に悪目立ちするものを指摘されない事である” と言うことだ。

次は “常識” である。普通と常識は先程も書いた通り、似て非なるものだ。何が違うのか、主にスケールが違う。都会の高層ビルと田舎の畑の端にある掘つ建て小屋のサイズくらい違う。

“普通” とはいわば法の下の上で下で決められた独自ルールを考慮して考えられたものだが、“常識” はその文明の表す意味を深める。

無意識に皆は常識を守っているのだろう。例えば電車の待ち時間を待つだとか、対価を払って食事をする等。社会全体で流れをもった一つの意思。それが常識である。

一つでも逆らえば『常識はずれ』と言われて後ろ指を指されたりする。集団圧力とはこのことだ。

また、常識は洗脳のような印象も受ける。幻想郷も含め、外の世界も含めた “学校（寺子屋）” は主に『道徳心』というものを学ばされる。

『これをしたら悲しむ』

『悪いことをしたら必ず帰ってくる』

レミリアは気付く。何故『悪いことは悪いことと認識されるのか』と。例を挙げるならば “無銭飲食” だ。人間は対価（お金）を払ってそれ専用の施設で食事をしたりする。一種の娯楽でもあるだろう。

そこで対価を払わず、逃げてしまうことを無銭飲食、食い逃げと呼ばれる。店では食い逃げと称される。では、山等に自生するキノコを

採って食べたとする。それは無銭飲食にならないのだろうか？

場所は店と山。どちらも固有の名称を持つには変わり無いし、黙って食べる行為も変わらない。何が違うのか？

対価を払って食べようが、食べなかりうが、結局は根底に『お金を払って外食するのが常識』と言う意識がある。当たり前、と言うものだ。

皆がそうするなら、これは常識なのだろう。

誰かが同調すれば、真似をして他も同調する。またそれを見て同調する人が現れ、そしてまた賛同していき、それが常識となる。

「何が言いたいの？」

レミリアは紫に聞いた。すると、彼女はニコリと笑い、何も返してはくれなかった。何故か、それは彼女のみぞ知るものだった。

ただの一言から始まったのに、どうしてここまで考えなければならぬのか。ゲシュタルト崩壊起こしてしまうぞ、なんて頭を抱える。気付けばハンター試験、暇過ぎる持久走は終わっていた。

レミリアはため息を吐き、気持ちを切り替える。面倒な事は後だ。今は、この運命を見届け、時々ちよっかいを掛けるだけで良い。そんな哲学者みたいなことはお門違いである。

トンネルの出口は自然豊かだった。高台なのか、かなり遠くまで見えるが、殆どは結構な濃霧で覆われており、かすかに分かるのはジャングルの大自然であると言うことだけであった。

「さて、続いている試験内容ですが…」

サトツが言いきる前に、制止の声が入る。何だ、何だと受験者は騒ぎ、その声の主の方へと目線を向ける。レオリオもまた、目線を向けた人間の一人である。

「俺は試験官だ！本物の！！ソイツは偽物の試験官なんだ……！証拠はあるぜ……？」

その試験官と名乗る男はぼろぼろの姿をしており、歩いているのがやつとであるのが分かる。所々は血で汚れ、とん、と背中を押せば倒れて死んでしまいそうな程度には弱っていると分かる。『証拠』を見るために一先ずトンネルの出口から少しだけ歩き、掘つ建て小屋の横へと向かう。

そこにはサトツに似たナニかのぼろぼろとなった死体があり、白目を向いていた。

「こいつは人を欺く猿だ！俺が本物の試験官なんだッ!!」

ふー、ふー、と息を荒くし、指を指してサトツを睨む試験官と名乗る男。最初から試験官であると示していたサトツは静かに見えて、その精神は波一つ立てない水ようだった。

ざわざわと緊張と不安が走る受験者達。やれどういことだ、偽物なのか、いやだつて付いてきただろ、何も言わないのか。レオリオも、レオリオの中から見ているレミアも馬鹿馬鹿しいと呆れを通り越して無関心である。

『面倒臭い』

レミアはその一言だけを発する。レオリオもそれに同調し、舌打ちを打ってしまう。それと同時に、突如、試験官と名乗る男とサトツが動く。

試験官と名乗る男は後ろへ頭から倒れ、サトツは手を顔面に持つてきては何かを防いだような行動をする。良く見れば、試験官と名乗っていた男の額からは血と、凶器となったトランプが一枚刺さっていた。サトツの手には、それが見事に収まっており、何者かに投げられ、それを防げた者と防げず、死んでしまった者に分かれたと言うことだ。

みるみると嘘の仮面が剥がれていく先程の男。体の服は体毛に変わり、手足が長く、体は細い気持ち悪い体型をしていた。それでも絶命していることには変わり無く、くくつ、と鼻で笑う声が聞こえてくる。

「こんなので死ぬなら試験官に相応しくない…：そうでしょ？◇」

『合理的ね、変態の癖に中々分かつてるじゃないか』

レオリオはうるさくなりそうな頭の同居人の一人が楽しそうに笑いながら述べている言葉を無視し、サトツを見る。

「次からは如何なる理由があろうとも、反逆行為と見なし、即失格とします。」

はあくい<sup>♠</sup>と、間の抜けた声で返事をされるサトツは、くるりと背中を向け、また付いてこいと命令してくる。持久走は終わってなかったようだ。

そこはジメジメした湿地、トンネルの出口から分かる程に濃霧が立ち込んでおり、とてもじゃないが楽しくハイキングもジョギングも出来そうにない場所だ。何処からか人外の叫び声等もしてくる。

受験者は気でも狂っているのか、等と思うようになるが、それでも付いて行くだけの内容。また同じものだ、ならば楽勝であると踏む。

「何だ、またマラソン?」

「今度も勝負する?」

「しても良いけど、絶対俺が勝つよ」

「それはやってみないと分からないよ!」

子供組は和気あいあいと楽しそうに話している。ゴンとキルアはこの短時間でもう打ち解けたのか、とんだコミュニケーションおぼけである。クラピカとレオリオは冷静に分析し始める。ただのマラソンでは無いことは、二人とも既に察しているようだ。

うだうだしていると、サトツがまた歩き始めたのか、声を出しながら奥へと進む。濃霧によってすぐに見失ってしまいそうなので、受験者は皆、先程よりもスピードをあげて、サトツの近くで走るようになっていた。

ざくざく、と走る音。殆ど同じ景色。声だけが木霊する位置。キルアとゴンは最後尾辺りなのか、クラピカとレオリオからはもう見失ってしまった。気付いたら居なかったのだ。

「ゴンやキルアは大丈夫だろうか…とても心配だ」

「大丈夫だろ。片方は野生児で、もう片方は只者じゃない雰囲気してるしよ!」

「ゴンはともかく、キルアは雰囲気だけで決めるのか…」

やらやれと呆れる。確かにこの数日、数週間で見てきたゴンの印象は間違いなく“野生児”である。ただ、クラピカがそれよりも目を引くのはレオリオと言う存在だ。

初対面は如何にも小物、悪く言えばすぐ死にそうと思った男だ。ガラも悪く、思考も浅い。

だが、時折見せる冷たさと主張の変わる早さ、それはまるで別人だとクラピカは思う。頭がおかしい、何かの病か?と思えばどれだけ楽で、それを聞いたならばどれだけ凄いのか。勇気は必要だが、無礼過ぎる。だからこそクラピカには聞けない。流星に怒りを通り越して何か別の感情を抱かれそうだからだ。

友人を疑いたくないし、思いたくない。クラピカは頭のおかしいレオリオと言う印象を頭から追い出し、今は眼前の試験へ集中する。

こつちですよー!と声が聞こえる方へ走り続けるだけの試験。濃霧を掻き分けていると、その掻き分けた軌道の後が後方へ続く。一瞬の儚い道標とやらだ。

『ねえ、私に代わりなさいよ。交代でやらない?』

「(いつもは問答無用で変わるのに、珍しいな。明日は天変地異でも起こるのか?)」

『アンタのそう言う生意気な所、私嫌いだよ。単なる気紛れよ』

気まぐれにしては前例がない。これが3日程度の仲だったなら、前例も無いのは無理がないが、覚えている中でも数年数十年は一緒、一緒と言えるかは別だが、それに近い関係だろう。これはレミアアに限った話でもない。咲夜やパチュリー、フランにも当てはまることだ。小悪魔はあまり此方へ意識も視界も移さないの、レオリオは主要五人を覚え、話に聞く妖精メイドとやら等のそう言った者は頭の片隅に置いてある。

レオリオに干渉してくる存在は、どうやらとても遠くに居るらしい。レオリオじゃどれだけ足掻いても対面すら出来ない程遠く、でも一番近い存在。妖精がメイドさんをやるなんて聞いたことがない、とレオリオは最初爆笑したが、今では有り得ると納得してしまっている。

因みに初めて聞いたとき、レオリオが思った妖精メイド像は俗に言うメイドカフェに働いている店員で、レミリア達に「美味しくなる呪文を唱えておきました！」とか言っただなと思っていた。余談だが、真面目にそのご飯が美味しくなる呪文はあるらしい。しかし「萌え萌えきゅん！」は違うとのこと。パチュリーは嘲笑していた。流石は天下の魔法使いである。天下かどうかは知らないので言葉の綾でもあるが。

懐かしいなあ、とどこか現実逃避している理由はもう分かっている。この声に付いて行っているが、いつの間にか自分達よりも前に、確かに人影はあるのに、こんなジメジメした土道で、足跡ひとつ無いからだ。あるのは自分達が通った後にだけ二人分。レオリオとクラピカである。

では、この人影と声は何なのか。現実逃避を止め、現実を受け止めてクラピカへこの事を言おうとすれば、既にクラピカは止まっていた。そして、唯一の道標でもあった声も動かず、でもずっと繰り返し返している。

「レオリオ、どうやら我々は騙されたらしい」

「言われなくても分かっている」

二人の目線の先には、オウムのように声真似をする不気味な鳥が居て、その鳥からサトツの「こつちですよー」と言う声が出されていた。また、人影は変わらずに存在するが、近付こうとしても遠くなり、立ち止まれば距離は変わらないので、こちらも幻影だった事が判明した。

ゲロゲロ

ゲコゲコ

グアーグアー

一方ゴンとキルア。彼らはかなり後ろで走っていたので案の定迷子になっていて、現在大蛙の腹の中である。

地面と間違えて足を踏み込んだが最後、ぱっくりと見事に食べられてしまったのだ。腹の中は胃液と言うか、謎のねばねばとした粘液が非常に居心地が悪く、臭い。吐き気を催すが、吐いても何もならないのは分かっていた。早く出たいと思ったキルアは腹の中から勢い良く蹴り、ゴンは自慢の釣糸を引つ掻けていた。

当然、問題の大蛙は腹の中の異物が暴れ、且つ、中々に美味では無かったのか、涙目になりながら勢い良く二人を吐き出し、どこかへ逃げていった。

「…ぷつ、ははは!!」

「見たかゴン！あの蛙の顔、最高に面白いよな！」

「そうだね！…にしても臭うなあ……」

子供組は無邪気に笑い、この試験を全力で楽しんでいる節があった。取り敢えず二人はこの蛙の体液の臭さをどうにかするため、再度走り出した。

「ボク考えたんだよね♡君らもどう？試験官ごっこ♡」

「勿論、君らがされる側で、ボクがする側…凄く興奮しないかい？♡」

ニコニコと笑みを浮かべるヒソカ。彼は現在、徒党を組んで挑んで来た無数の受験生に囲まれていた。

徒党の目的はヒソカの無力化であり、先程の猟奇的現場を見て意を決したらしい。彼らは様々な武器を持って、それをヒソカへ向けていた。

それを茂みの中から観察するレオリオとクラピカ。二人はヒソカの戦闘能力を少しでも見ることが出来ればそれで良かった。

少し開けた森の中には変わらず濃霧が覆い、それでもそこだけは何か薄くなっている気がした。草木は湿気で雫が滴り、地面もぬかるんでいて、足が取られそうと思える程度に足場が悪かった。

だが、そんなことを諸ともせず、ヒソカは向かって来た男達を、全員、遊び心からなのか、何の変哲も無さそうなトランプのカード一枚

で切り伏せ、リーダー格の一人をデザートと称し、失格だと伝えては彼も殺してしまう。

生唾を飲む音が聞こえる。二人は同時に飲み込んだらしく、目を丸くしていた。何が起きたのか、レオリオは末端しか理解出来なかった。しかし、それは上々な方で、正しく秒殺を成し遂げたヒソカを、クラピカは戦闘能力すら測れず、底知れぬ恐怖を覚えた。

「君らも、どう？◇」

鋭い眼光が二人を射抜く。どうやら見ていたのがバレていたらしい。背筋が凍ると言う言葉を今理解した気分だった。

クラピカが合図で別々に逃げようと提案してくる。けれど、レオリオは気付いていた。いや、教えてくれた。

『貴方が逃げたら、きつとあの変態はこの子供達を狙うわよ。貴方の大切なオトモダチをね』

遠目からだが、気配を完全に消していたゴンの釣竿がちらりと見えた。レミアアの言い分じゃ、二人居るらしい。十中八九、ゴンとキルアだ。

『可哀想に、まだ若いのに、貴方が逃げるから死んじやうわ。あの死んでる人間のように…惨く、残酷に、そして一瞬で』

止めてくれ、やっと少しだけ心を開けたんだ。かつての親友、ピエトロのように命を刈り取らないでくれ。更に、隣にはクラピカも居る。どう考えても、三人じゃ、いや、俺でもヒソカに勝てるかは分からない。

なのに、そんな、無慈悲な宣告をしないでくれ。

『そんな事を言われても、私は悪魔のようなものよ？慈悲は生憎と持っていないの、残念ねえ。貴方のせいで、また罪無き人間が死んじやうの！』

…分かってるでしょ？貴方じゃアレに勝てないわ』

「一番分かるさ、自分自身だからな…」

レオリオは立ち上がり、茂みから出る。単騎で、それも向かって来るとは思わなかったのか、ヒソカは目を細め、レオリオを見る。クラピカもまた、驚き、レオリオを注視する。



レオリオは問う。レミリアならば、アレに勝てるのか、誰も死なせないのか。

レミリアは答える。勿論と、当たり前であると。

死なれては困るし、死んでも困る。レオリオは二度と自分が自ら関わる友人を死なせない為、レミリアは今後の彼らの運命の為。利害の一致、それ故に、レオリオはすんなりと意識を手放す。代わりにするのは、紅霧の悪魔。

『ご機嫌よう、忌まわしき変態さん。』

ヒソカとレミリア、距離は大体五十センチ。どちらかが一步步けば、もう目と鼻の先である距離だった。辺りを取り巻く霧はいつの間にか紅くなっていて、不気味な雰囲気を生み出していた。単純な話、レミリアはヒソカに力勝負なら負けない。だが、全力を出せないのも事実だ。

結局は精神が肉体に取り憑くだけであり、本来の身体能力は肉体に依存する。それを無理矢理底上げしてるだけである。

「へえ、君…誰?♡」

『初めまして、便宜上じゃあ「お嬢様」と呼ばれてるが…貴方には関係ないわ。冥土の土産をあげる程、付き合っても何もないからな』

互いに喉から笑い声を出す。会話は聞こえてないのか、ゴンもキルアもクラピカも、何をしているのか分からない。一つ分かるのは、彼らがこれから何をするのか、である。

世紀の対決では無いにしろ、このハンター試験で希に見る有数の争いであることは分かっていた。誰も彼もが静まり、黙って観戦していた。

『今日は最低に素敵な出会いがあったから』

「今日は最高に素敵な出会いがあったから」

血塗れの日になりそうね。

素晴らしい日になりそうだ。

右手に構えたトランプを、ヒソカは勢い良く右から左へと、首を掻き切る軌道をして振り出す。だが、その腕は首に到達することなく、未然に受け止められ、逆にレミアは左足でヒソカの顔面を狙い、上段で蹴り上げる。実はゼロ距離であろうとも、蹴りはどこにでも放てる。だが、素人は重心の使い方が儘ならないのだ。しかし、レミアはやってのけ、レミアから見て右側へヒソカは弾き飛ばされる。

そのままレミアは妖力を放出し、槍を作り出す。

神槍 スピア・ザ・グングニル

槍は紫の光を出し、禍々しさを出す。何故だが彼女が使えば神々しさもあつた。

いつもの体格じゃないからか、距離感は掴み難く、しかし、上手く立ち回り、一気にヒソカへと距離を詰めれば、腹を狙い、一突き。衝撃波と共に木々が崩れる音、土煙を出しながらも、そこにヒソカが居ないことに気付く。

だが、遅かったのか、ヒソカもまた、レミアの顔面を右ストレートで左側から打ち込み、地面に強く強打させる。右手に持ったグングニルを薙ぎ、ヒソカを後退させ、立ち上がるレミア。端から見れば謎の力で不思議な槍を出したレオリオにしか見えず、ゴン達は驚愕していた。

「ん、、イイねえ…♡」

『「変態が…ッ！」』

レミアは自身の前に魔方陣を展開、合計五つのそれは大小異なるものの、全て同じ紋様であり、ヒソカを狙い、光弾を打ち出す。弾幕と呼ばれるそれは、ごっこ遊びに使われるようなものではなく、殺意を込めたものであり、一つ当たれば小さな火傷では済まない。弾幕は光弾だ。そして、光とは熱にもなる。普段は妖力でコーティングし、その熱も感じさせず、多少安全に考慮したものになるが、それでも下手な者が弾幕ごっこをすれば死者が出る。

咲夜の弾幕が良い例だろう。あれはナイフを使っている。弾幕ごっこであろうと、あれは本物のナイフであり、自機判定と呼ばれる、弾幕ごっこで狙うべき的以外に当たれば出血も出るだろう。

そんな危ないオモチャを、今、ヒソカに遊びを越えた圧倒的質量で押し潰そうと打ち出している。更に、其々の端にてレーザー弾幕を打ち出す魔方陣も出し、より殺意の高さを示す。

派手な音と、それでもどこか美しい光の弾は、見るものを圧倒し、また、当事者の目眩ましの役割もしていた。弾幕は光弾、つまり、閃光弾がめちやくちや投げられてると大差はない。目が潰れても可笑しくはないのだ。

だが、ヒソカは止まらない。華奢な体格は決して鈍くはない俊敏な動きで次々と躲けて行き、距離を詰めていく。時々回避しきれず、グレイズして火傷するも、そんなものでは止まらない。

やるならば腕の一本、足の二本は取らねばならぬだろう。

『さっさと死に晒せ、人間風情がっ!!』

「君も人間でしょ、その言い方じゃあ、まるで人間じゃ無いみたいだよ」  
◇

レミリアは回避先を予測し、そちらへ槍を投擲。それも紙一重で回避される。また、その際に弾幕を弾き返していくヒソカ。

レミリアはそれを軽く薙ぎ払い、ヒソカを見据えようとするが、そこにはヒソカの姿は無い。

『どこに…!』

「ハハハ」

『なっ…ぐっ、貴様ア…!!』

いつの間にか右側に回り込まれていたレミリア。あの弾幕を対処する一瞬の隙で、一気に距離を詰めてきたと理解できたレミリアは、咄嗟に体を捻り、フルスイングの左ブローをヒソカの横腹を狙い、一撃。だが、そんな単調な動きは軽くないなされ、振り切ったその隙を狙い、下顎への膝蹴りを打ち込まれる。

脳が揺れる感覚を覚えるレミリア、一瞬白目を向きそうになるも、足を踏み出し、踏ん張りながら、右貫手を胸部目掛け打ち込もうとする。それも、その攻撃はフェイントであり、本当の狙いは眉間を狙った左ストレート。ヒソカはそれに気付かず、防ごうと動くが、既に攻撃はフェイントへ移行し、見事にヒット。

ぐわん、と頭から後ろへ体が反れたので、続いて男性共通の弱点、皆さんご存じの金的への蹴り上げ。勢い良く蹴り上げたそれは、見事にヒット。

「おっ……!!」

流石のヒソカもレミリアの力で蹴り上げられたそれに悶えるしか無いのか、若干苦しそうな声を上げる。だが、硬くなっていたそれは、変態だからなのか、喜びをかんじている。感じている。やはり変態かもしれない。更に拍車を掛けるのは、その鋭い攻撃で笑みを浮かべていることだった。

ヒソカは深い笑みを浮かべていて、それをレミリアに向けていた。気持ち悪い、と眉間に皺を寄せ、最後の一撃を打ち込もうとするレミア。だが、それは叶わなかった。

気付けばレミアは宙に舞っていた。いや、そうじゃない、目を開けば見知った顔、小悪魔が居たのだ。

「…小悪魔?」

「すみません、お嬢様…随分と魔されていたみたいで…」

陰陽玉に触れていた手を、小悪魔に離された為、意識のリンクが途切れたのだろう。つまり、今、レオリオの体は元のレオリオのままである。

不味い、と本能で察したレミア。急いで戻ろうとするも、それを小悪魔に止められる。冷や汗をかいている小悪魔は、恐怖で屈しそうになっていても、それでも、主人の友人であるレミアの身を案じているのだ。

冷静では無かったレミアは、打ち水を投げ付けられた気分だ。尤も、そんなの感じたこともないので想像と偏見である。

だが、不味いと言う状況も変わらない。しかし、もう何か出来る訳でもない。言い訳をすれば、レミアの戦い方を乱されていた節があった。そして立地の悪さである。あちらへ意識を飛ばすとまず空が飛べない。レミアは普段、上から質量ごり押し戦法で完封しているが、それが出来ない。

次に、どこか動き難かった。時々貼り付いたように動けないときが

あつた。そう言えばあの変態は「念」を使えたと思ひ出す。では、違和感はそれか、と理解した。動けない、と言うよりも動きが鈍くなつたのだろう。

本当はただ底力が凄かつたので念程度では止められなかつただけであるが、それには気付かないレミリアであつた。

一方、レオリオ。彼は突如現実へ戻されたと思えば、拳が既に迫つていて、見事にヒット。そのまま、謎の疲労感によりぐったりと倒れてしまつていた。

ゴン、キルア、クラピカは、レオリオの戦い振りに戦慄してゐた。まず、自分は彼に勝てないだろう、と。そして、その彼に勝つたヒソカには、まだ手も足も出ないだろうと。

「…」

ヒソカは無言でレオリオを肩に背負い、どこかへ歩いていく。三人には目もくれず、だ。ヒソカは理解してゐた、彼ら四人は未来ある青い果実。特に、このレオリオとゴンは自慢出来る。楽しみだ、とまた己の象徴を硬くしながら、彼は紅い霧を迷い無く歩いていく。

その場に残つたのは、レオリオの友人と言える三人であつた。

「なあ、レオリオって……何者なんだ？」

キルアの一言は、残る二人の意識の根底に根付くようになるのは、そう遠くない未来であつた。